

Northern Europe Study Tour

北欧研修 2019

報告書

2019/2/16 – 2019/2/24



聖心女子大学文学部教育学科

目次

はじめに	1
1. 視察報告.....	2
グリムスタ義務教育学校と学童保育	2
リラ・テNSTA（レヅジョエミリア方式を導入しているプリスクール）	9
クリストッフエル学校（シュタイナー学校）	12
シェルブリンクス学校（障がい児・健常児との統合教育）.....	15
トゥンバ高校.....	20
ワーナー真由美さん宅 共有パーティールーム.....	23
グローバル・チャレンジ（民間のシンクタンク）	27
スタッドミッション・フォークハイスクール（民間の生涯学習機関）.....	30
2. 個人感想.....	34
北欧視察旅行に参加して	34
想像力.....	35
未来の担い手.....	36
スウェーデンの子育て.....	37
全ては「子どもの権利」の元に — 日本と比較して —.....	38
本当の意味でのインクルーシブ教育	39
教師の労働環境の違い.....	39
スウェーデンの色鮮やかな教育現場.....	40
自立を促す国スウェーデン	41
多様な学びへのアプローチ	42
全く違う価値観に触れることができた 1 週間.....	43
子ども一人ひとりが大人になるまでの教育とそれを支える体制にふれて	44
イノベーションとソーシャル・デザインを生み出す土壌.....	46
【付録 1】 北欧研修帰国後アンケート調査結果	47
【付録 2】 全日程	56

はじめに

この報告書は、平成 31(2019)年 2 月 16 日から 24 日の 7 泊 9 日間の日程で、聖心女子大学文学部教育学科で行ったスウェーデン・ストックホルム市における教育視察旅行の記録です。

教育学科では平成 26 年度よりグローバル化の下における教育と生涯学習の在り方について探求することを目的として、授業と関連づけた海外研修を行っています。平成 30 年度は、2018 年 8 月 29 日～9 月 7 日にオーストラリア・カンガルー島、2019 年 2 月 26 日～3 月 4 日に米国カリフォルニア州・サンディエゴにおいてもスタディー・ツアーを行いました。

北欧型インクルーシブ教育の視察研修は、平成 27 年度と 28 年度に続き 3 回目となりました。今回は澤野由紀子教授と加藤洋子准教授の引率により、比較教育学、生涯学習概論、教育学演習などの授業と関連づけて教育学科の 3 年生 11 人に限定して実施したところ、トラブルもなく大変充実した研修を行うことができました。研修の一部は学生自身が企画し、ストックホルム在住の日系人の教育関係者や高校生と懇談会を行うことができました。現地では毎回お世話になっているスウェーデン・クオリティー・ケア(SQC)のエーミル・オーストベリさん、トゥンバ高校教諭のアールベリエル松井ひさ子さん、エステサロン経営者のワーナー真由美さん、ルリア工科大学准教授のケネット・アブラハムソンさんに大変お世話になりました。ここに記して謝意を表させていただきます。

また今回はスカンジナビア航空を利用し、コペンハーゲン経由でストックホルムに入ったため、往路はデンマーク・コペンハーゲンに 1 泊し、まずアンデルセンゆかりのコペンハーゲン市内の観光をしてからスウェーデンに向かいました。半日の市内観光を流暢な日本語で大変効率よくボランティアでガイドしてくださったミノ・コスマダキさん、ミノさんを紹介してくださったソーレン・クロマンさんと本学卒業生の藤田さなえさんにも御礼申し上げます。

訪問先で私たちをあたたかく迎え、たくさんのご教示くださったすべての皆様へ、心より感謝申し上げます。

北欧スタディー・ツアー2019 参加者一同



1. 視察報告

グリムスタ義務教育学校と学童保育

日時	2019年2月18日(月) 9:00 ~ 11:00
訪問場所	Grimstaskolan, Fritidhus, グリムスタ義務教育学校と学童保育 (Kanngjutargränd 12, Vällingby)
訪問先担当者	Marita Svahn, Head Master
視察目的	移民としてスウェーデンにやってきた子どもたちに対して、学校ではどのような学びを提供しているのか、どのような対策を講じているのか、などといった教育機関としての取り組みについて知り、日本と比較して学びを深める。
記録者氏名	松尾 智子, 柳澤 郁

○Grimstaskolan について

Grimstaskolan (図1) は1956年に設立されたストックホルム市が運営主体となる、公立の小・中学校である。年齢でいうと6歳～15歳、学年でいうと0年生～9年生の子どもたちが在籍しており、現在の児童数は約630人、職員数は130人である。(0年生の教育は依然と異なり現在は義務教育化されている。) 学年を、1年生～3年生、4年生～6年生、7年生～9年生と3つに分け、3学年ごとにそれぞれ同じ建物で勉強していて、1クラスの人数は約25である。

この学校が所在している地域は住民の80%以上が移民であり、よってこの学校に通う子どもたちの80%以上の保護者が外国からの移民、またはスウェーデン系外国人であるため、学校教育の中でも言語の発達により力を入れている。例えば、第二言語としてのスウェーデン語の授業(後に詳しく記載)があったり、教師たちのほとんどが、大学にて子どもたちの言語発達のための講義を受講していたりなど、取り組みは様々だ。また、こうした背景に基づいて、この学校では子どもたちが話す母国語の種類も多様化しており、その数は約40カ国で、最も多いのがアラビア語、次がソマリア語である。もちろん、母国語の授業もあるが、母国語に関してはストックホルム市内の組織が取り扱う内容であるため、市のほうからそれぞれの母国語を教える教師が派遣されるシステムとなっている。

これらのような教育的支援だけではなく、Grimstaskolanの教師たちは、子どもたちとの関係性を重要視している。移民としてスウェーデンにやってきた子どもたちは様々な背景や事情を抱えていることも少なくない。そのため、まずは子どもたちの保護者の仕事内容や収入、経済状況や家庭内での問題はないかなど、子どもたちの持っている不安を把握し、理解することで信頼関係を築いていく。このように子どもと教師がより良い関係をつくることで、子どもの健全な成長にも繋がっ



図1 Grimstaskolanの玄関

ていくとかんがえているのである。

子どもたちを支える専門家として、健康チームが常務されている。内訳としては、ソーシャルワーカーが1人、カウンセラーが2人、臨床心理士が1人、正看護師が1人、という内容で、週に1度医師が訪問している。またそのチームの中には、1対1や少人数の生徒に教えたり、教室に行き先生や子どもたちのサポートをしたりという役割のスペシャルティーチャーも含まれている。



校庭はとても広く、子どもたちが思いきり走り回って遊べそうな十分な敷地が確保されていた。日本の学校ほど遊具が設置されていない印象を受けた。(図2)

図2 校庭の様子



日本の学校の職員室のようにデスクが並べられていて、自分の席が決まっているという形式ではなく、ソファや大きめのテーブルが置いてあって、教師たちはそれぞれ自由にくつろいだり、ディスカッションしていたりと、フリーなスタイル。(図3)

図3 職員室の様子

職員室の一角には、教師たちが自由に使えるコーヒーマーカーや電気ポット、電子レンジなどがおいてある。自身のマグカップを洗うための流しなど簡易的なキッチンのようなスペースが設備されている。(図4)



図4 職員室の一角

○Grimstaskolan の学童保育について

スウェーデンでは、義務教育ではないにも関わらず、ほとんどの子どもたちが学童保育に通うという。もちろん Grimstaskolan でも学童保育が実施されている。学校が始まる前の 6:30~8:30 と放課後 16:30~18:00 に子どもたちは学童保育に通うことができる。太陽・タツノオトシゴ（就学前コース）と、ヒトデ・イルカ・パール（1~3 年生）というように、未就学児と 1~3 年生が通うことのできる 5 つのコースが設置されている。今回見学させていただいたのは、イルカコースの教室（図 5、6）である。

スウェーデンでは学童保育についての大学教育を 3 年間受けている選任の教師がいて、国が定めている小学校教育の中に含まれている学童保育のカリキュラムに則って子どもたちを指導している。

学校が終わったからといって、学びが終るわけではなく、学童保育も子どもたちの学びの場として捉えられている。内容としては、森へ散歩に行つて植物や動物の種類を教わることで自然科学を学んだり、パン作りを通して g や cc などの数字に触れることで算数を学んだり、子どもひとり一人のニーズに合わせた教育を実施することを重要視したものとなっている。他にも様々な作品をつくる芸術や言語、コミュニケーション、民主主義や良い友だちについてなどのソーシャル訓練なども行われている。おやつを食べたり、宿題を教師が手伝う時間があったり、読書をすることも大切にしている。30 年前までは学童保育は遊ぶだけの時間であったが、現在は“教える”という視点を重視しており、また、子どもたち自身も五感を使って学びを深められる教育を目指している。この考えの根源にあるものはヴィゴツキーである。できない子はできる子を見て学んでいくというような、子ども同士の学び合いが生じることをサポートしている。

学童保育を選任としている教師は、一般の授業にも参加している。

1 日 4 時間程度、アシスタントとして教室に入っており、子どもたちを落ち着かせたり、専門家のケアが必要な子どもを安心させたりと個々への対応を中心としている。つまり学童保育の教師は、子どもたちの一般授業の教室での様子と、学童保育での様子両方を、より具体的に知ることができるのである。授業内で、例えば算数が苦手な子がいたら学童保育で援助できるように準備をするなど、相対的に子どもと関わることはとても良い点であり、子どもの成長として、そうした大人が身近にいるのは強みでもある。

保護者との連携も重視しており、Grimstaskolen では年間 2 回、保護者との面談が行われているが、その面談には学童保育の教師も参加し、子どもたちのより多くの面を保護者に伝えている。



図 5 教室（イルカコース）の様子

方



図 6 教室全体の様子



教室の隣には、このような芸術の勉強をするための部屋が用意されている。絵具やクレヨン、ハサミ、画用紙などの様々な画材だけでなく、トイレットペーパーの芯など身近にあるものでなにかを作るという経験にも取り組んでいる。(図 7、8)

壁には子どもたちが作った様々な作品がたくさん飾られている。(図 9)

図 7 作品づくり等を行う部屋



図 8 子どもたちの作品



図 9 子どもたちの作品



図 10 自由遊びの部屋

美術室のさらに奥には、このような幼稚園の一室のように子どもたちが自由に遊べる部屋が用意されている。ブロックやミニカー、赤ちゃんのお人形などと様々なおもちゃがある。

画像右下のように、おもちゃが片づけられることなくそのままになっているのは、子どもたちが前日の遊びを継続できるような工夫であるということだ。(図 10)

美術室のさらに奥には、このような広めの部屋が用意されている。ここでは壁に描かれているように、子どもたちがダンスや演劇をしたり、画像左上に見えるプロジェクターで映画を見たりする。



図 11 プレイルーム

イルカコースの担任をしているアリヤさん（画像左）は、芸術を得意としており、学童保育の中では、それぞれの教師が得意なものを担当するという形で仕事を分担しているという（図 12）。



図 12 アリヤさんとエーミルさん



図 13 Grimstaskolan の食堂にて子どもたちといっしょに

○準備クラスについて

7-16歳の難民の子どもが18名在籍している(図1)。難民の子どもがスウェーデンの学校に入る際、学校は市から難民の子どもの情報をもらうことができる。母国ではどこまで教育を受けたか、どの程度知識があるか、算数や自然科学はできるか、母国語の読み書きがどの程度できるかといった学力の情報だけでなく、どこの国から来たか、戦争の経験があるか、親の経済状況はどうかなど子どものバックグラウンドについての情報を得ることができる。また、難民の子どもは学校に入学してくる時期がバラバラであるため、勉強開始の時期がそれぞれ異なる。そして一人ひとりの学歴に大きな差がある。そのためスウェーデン語の能力によってクラス分けを行い、一般クラスに入るには学力が足りていない生徒が準備クラスに入り、スウェーデン語や英語などの語学やテーマ教育を学ぶ。準備クラスでの学習がある程度身につけてきたら、体育や芸術の授業を一般クラスに入って学び、徐々にスウェーデンの教育に慣れていく形式をとっている。準備クラスには3名の先生が運営されており、そのうち1人は支援を必要とする子の隣に常についていた(図2)。残りの先生のうち、一人の先生がホワイトボードの前に立ち授業を行っており、もう一人の先生は教室の横でクラス全体を見ながら、個別でサポートを行いながら授業が行われていた。



図1 準備クラスの様子



図2 支援が必要な子の隣につく先生

○ 授業風景：視察をした4日前がバレンタインデーということもあり、この日は「愛」について考えるというテーマ教育の授業が行われていた。テーマ教育とはテーマに沿って考えを出し合い、そこからさまざまな教育と関連付ける教育のことである。子ども一人一人に発言の機会があり、発言を通して自分の考えを言葉にすることでスウェーデン語を身に付けたり、友達の意見を認め、受け入れる力を育んだりする。移民の子どもの多くは母国で自分の意見や考えを話す習慣がない環境や話すことができない環境にいた。そのためスウェーデンでは学校教育を通して自分の考えや意見などを話すことができる人間を育てる教育を行っている。授業ではまず先生がホワイトボードの中心に「よい友達」と書き、その下に四角を書き四角の内側の四隅に 1.優しい 2.楽しい 3.親切 4.嘘をつかないと書き込んだ(図3)。

○ そしてこの4つの中であなたは何がよい友達だと感じますかと生徒に問いかけた。生徒は1~4の中で自分が考える「よい友達」に一番近いものを選び教室の四隅にそれぞれ移動し、選んだ理由を発表

していった。1.優しいを選んだ生徒の一人は「いい友達といると優しくなる」と発表していた。2.楽しいは低学年の子どもが多く選んでおり、「友達とサッカーをすることは楽しい、おしゃべりが楽しい」と発表していた。3.親切は高学年の子どもが多く選んでおり、「友達に親切にされると嬉しくなる、友達を助けることで他ことも楽しくなる、親切にすると感謝されお互い嬉しくなる」などの意見が出た。4.嘘をつかないを選んだ生徒は「嘘をつかれると悲しい気持ちになる」と発表していた。次に先生がホワイトボードの中央に「愛」と書き、愛とは何ですかと生徒に問いかけた。生徒たちは自分が考える「愛」をホワイトボードに書き込んでいた。まだスウェーデン語を書けない生徒はスウェーデン語が分かる友達に教えてもらいながら書いたり、絵を描いたりする様子が見られた(図4、図5)。生徒全員が書き終わるとなぜそう思ったのかを一人一人に発表させていた。この授業を通して自分の気持ちを言語化すること、スウェーデン語を話すこと、聞くこと、友達の考えを認めることなど様々な学びが関連していると実感した。



図3 板書の様子



図4 自分が考える「愛」を絵で表現している様子



図5 自分が考える「愛」をスウェーデン語で板書している様子

リラ・テンスタ（レッジョエミリア方式を導入しているプリスクール）

日時	2019年2月18日（月）	13：00～16：00
訪問場所	Lilla Tensta リラ・テンスタ（レッジョエミリア方式プリスクール） （Hjulstråket 10-14 , Stockholm）	
訪問先担当者	Christina Lindmark, Head Teacher	
視察目的	北欧での幼児教育について、レッジョエミリア方式で保育を行うプリスクールから保育の様子、保育者の役割、教育制度等について日本と比較して学ぶ。	
記録者氏名	矢倉 万瑤	

○Lilla Tensta について

Lilla Tensta（図1）は2017年に開園されたばかりの園で、園長先生等が管理されている5園のプリスクールのうちの1園である。管理されている全5園での子どもの人数は約316名、保育者の人は約80名である。

今回訪問させて頂いたLilla Tenstaの子ども的人数は約116名で、8つのユニットに分けられている。このうちの1ユニットはオープンプレスクール（図2）として、親子のため（育児休暇中を含む）や保護者のネットワークを作るためにある。この他の全ユニットでは訪問時プロジェクトベースラーニングとして、“子と自然科学とアート”が共通テーマとされており、各ユニットでは子どもの年齢や実態に合わせて、風について、銅像を見て制作過程を考える等、更に細かいテーマがあり、これらに合わせて保育や保育室内の環境構成が行われていた。

園内には保育室以外にイタリア語で“ピアッツァ＝広場”と言われる、ユニット間の遊び場がある。（図3）この遊び場の玩具は毎日換えられているようだ。園庭にも様々な工夫がされており、野菜等の菜園や野生のリスが住んでいる等、子どもが豊かな自然環境の中で生活することができる。



（図1）Lilla Tensta 園舎 （図2）オープンプレスクール （図3）“ピアッツァ＝広場”の様子の保育室内

保育方針は、

- ・子どもは興味や意欲をもとに自ら学ぶ
- ・子どもはユニークである
- ・子どもは他の子どもと保育者と一緒に社会を経験する
- ・民主主義について学ぶ
- ・他の子どもとコミュニケーションをとり、協力する 等が挙げられていた。

○保育室内の環境構成について

各ユニット保育室内にはプロジェクト・ベースト・ラーニングを行うため、レジャエミリア方式ならではのボックス環境があった（図4～6）。ユニットのテーマ、子どもの年齢や実態によって、用いられ方がとても異なる。



(図4)



(図5)



(図6)

訪問させて頂いた Lilla Tensta に在園している子どもの約9割がスウェーデン以外の国に背景を持つ子どもである。そのため母国語が約50カ国あり、子どもの言語能力は様々である。この園では園生活で絵本を読む機会のために、iPad等のITを活用し、壁面にあるQRコードを読み取り、様々な言語で一冊の絵本を読むことができる環境が設定されていた。（図7）この環境構成から、在園している子ども一人一人の母国語を大切にしていることが分かる。このような工夫以外にも子どもの母国語を話すことができる保育者が園にいない場合には、ボランティアとして言語サポートの方に来てもらっている。

言語発達は子ども同士の遊びの中や保育者の対応から発達する。保育者の対応とはその子どもと同じ目線で声掛けする、言葉付けをする、絵やボディーラングエッジ等を用いることである。このような支援を行うことで自然と子どもは新たな言語を学び、そして保護者は安心して見守ることができるそうである。

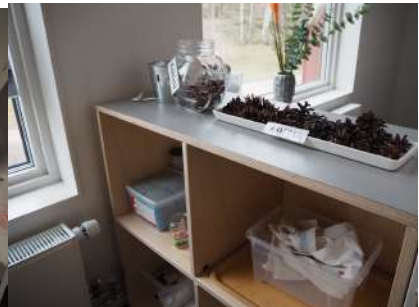
このように北欧、レジャエミリア方式ならではの保育室内の環境構成があると同時に、日本と同じようなコーナー保育の環境構成もされていた（図8、9）。



(図7) 母国語保護のための工夫



(図8) 絵画コーナー



(図9) 製作コーナー

○保育者の役割、保護者支援について

スウェーデンでも日本と同じように保育者不足が問題視されている。そんな中この園では、保育者が

少しでもストレスや疲労をあまり感じないように様々な工夫がされていた。例えば職員室にマッサージチェアが置いてあったり、また保育中に腰を痛めないようにローラーが付いている椅子があったりと、保育者が働きやすい環境が設定されていた。

保護者支援としては、ソーシャルサービスや医療機関等に関する様々なセミナーが開かれていたり、保育者等が保護者と話し合う機会を定期的に設けている。このように保護者の悩み等を聞く場をきちんと設けることが大切であるとされていた。



(図 10) Christina Lindmark, head teacher(中央) との集合写真

クリストッフェル学校（シュタイナー学校）

日時	201年2月 19 日（火）	10：00 ～ 12：00
訪問場所	Kristofferskolan クリストッフェル学校（シュタイナー学校） (Marklandsbacken 11, Bromma)	
訪問先担当者	Mr Ruhi Tyson	
視察目的	スウェーデンでシュタイナー教育をどのようにして取り組んでいるのか、そして成功している秘訣を探る	
記録者氏名	辻 香穂	

クリストッフェル学校は、1949年に創設された私立学校である。1953年にクリストッフェル学校財団創設。1958/59年度にある保護者の提案によってシュタイナーのアイディアを取り入れた校舎の建設を建築家エリック・アスムッセンに依頼。1961年に全12学年からなるシュタイナー学校となる。

現在では、1-12学年まで約800人の児童生徒が学んでいる。基礎学校では芸術、音楽と手工芸を重視した教育を行っている。ギムナジウム(10-12学年)には、自然科学コース、芸術コースおよび社会科学コースがある。また同じ敷地内に、就学前学校と教員養成カレッジが併設されている。スウェーデンでは私立学校も児童生徒・学生から授業料を取ってはいけないことが教育法で定められているため、当校もすべて無償である。

環境構成：広大な土地に平屋の建物(校舎)が並んでおり、余裕のある作りになっている。自然豊かな環境になり、落ち着いた雰囲気勉強に取り組めるようになっている。



校舎の様子

こちらの学校では、様々な方法、特に手工芸で子どもたちの能力を伸ばしていた。手工芸を行う理由は、考え・気持ち・意欲を刺激するため・子どもたちの手足・感情の訓練と何事も自分でやってみなければ出来るか分からないことを知るために手工芸のカリキュラムが組み込まれている。

手工芸の一つ”製本作り”では、中学一年生から行っており、最初の紙づくりから子どもたちで取り組んでいる。製本作りの過程で、アジアと西洋の文化の違い、例えば縦書きか横書きか、羽ペンか筆を使うかなどを比較をしながら文化の違いを学んでいる。ここで特に重要なのは、文化が違うからといって差別はしないことであり、スウェーデンの異文化共生社会を学校の現場から感じる事ができた。学校の現場から’差別をしない’考え方をすることにより、スウェーデンの異文化共生社会が出来ているのだと思

った。製本づくりという1つの単元から様々な事柄を学んでいた。他にも、家具作り、モザイクアート、スウェーデン伝統の織物や鋳型を授業として行っており、様々な種類の授業が展開されていたと同時に内容も本格的で、日本の美術の授業とは全く違う印象を受けた。スウェーデンはIT先進国で新しい物を次々と開発しているが、授業でスウェーデンの伝統的な手工芸を取り入れており、昔からあるものを大事にする心を養っていた。



製本づくりの教室の様子。机が円型に並べられており、日本の教室とは違う雰囲気だった。



製本づくりの教科書に置いてあった、クレヨン。ミツロウから作られており、教室に置いてある。こちらの学校も他のスウェーデンの学校と変わらず、クレヨンなどの物は学校で準備してあった。製本づくりの授業も自分で用意するものはないようで、学校で全て準備してある。



とある生徒のモザイクアートの作品。自分の顔(目元)を砕いたタイルで描く。



鑄型専用の建物(平屋)があり、設備も非常に整ってあった。学校内に写真のようなかまどがあり、作品が作れる設備が整っていた。

シュタイナー学校ならではの特殊なカリキュラムといえば、教材や授業構成が独自に行われていること・オイルトミーである。音楽に合わせて踊る特別な授業、他にも授業の進め方が独特で、こちらの学校では算数は毎日勉強しているが、それ以外の科目は週に数時間ではなく、2~3週間は続けて毎日勉強する。加えて、こちらの学校、いわゆるシュタイナー学校では教科書を使用せず、子どもたちの手作りの教科書を作りながら勉強する。自分専用の教科書を作り上げている。学校訪問の際、児童手作りの教科書を見せて頂いた。見ると、色使いがカラフルで世界に一つだけのオリジナルが出来上がっていた。授業方法も特別であり、例えば、授業で新しいことを学ぶ際には、日本では教師が黒板に板書をし、それを児童がノートに同じように書いていくのが一般的な授業方法である。しかし、こちらの学校ではP(アルファベット)を覚える場合、先生が'プリンセス'のお話を読み、子どもがPとプリンセスの絵を書いて覚えるといったような授業展開だった。大人(教師)が一方的に教えるのではなく、子どもたちの想像力を伸ばしながらの教育を行っていた。



こちらの学校が描く子どもの最終目標は、卒業できる頃にはここで各分野で学んだことや知識を活かし、人が人らしく生き抜いていく可能性を残すということだった。

シェルブリンクス学校 (障がい児・健常児との統合教育)

日時	2019年2月 19日 (火) 15:00~17:00
訪問場所	Källbrinksskolan シェルブリンクス学校 (障がい児・健常児との統合教育) (Källbrinksvägen 55, Huddinge)
訪問先担当者	エリ=ノール校長先生 カリーナ副校長先生
視察目的	先進的な統合教育を視察することで、環境整備や生徒への接し方、教師の在り方等具体的な教育方法について学ぶことを目的としている。
記録者氏名	島津朱里

【シェルブリンクススコーラン概要】

学年 : 7~9年生 (13歳から15歳)

生徒数 : 約400名

教職員 : 約40名

【シェルブリンクス学校の創立について】

シェルブリンクス学校創立の背景

シェルブリンクス学校は、障がい者と健常者の統合学校であり、全生徒のうち3割程度が障害をもっている。スウェーデンでは、身体障害に対するサポートが充実しているが、目には見えない脳に関する障害に対しては課題が多いとされる。シェルブリンクス学校を創立したエリ校長先生とカリーナ副校長先生は創立以前、一般クラスの10~15名は何らかの障害があるということに気づき、そのような子どもたちをサポートするために7年かけてシェルブリンクス学校を創った。

脳に障害を持っている子どもたちは、時間を理解したり、計画を立てたりする前頭葉をうまく使うことができないため、エリ校長先生たちは勉強において大切な前頭葉を使うことができるように教室環境を整備したり、補助器具を用いたりしてサポートをしている。

シェルブリンクス学校の歴史

エリ校長先生とカリーナ副校長先生は、3年かけて生徒に対応するプログラムを作成し、4年間それを実施している。最初の1年は組織作りのため健康予防に関する勉強を行い、2年目は教師たちが脳の働きについて理解する必要があるため教育機会の提供を行ったり、教師と生徒の関係づくりについて話し合う場を設けたりした。3年目は全ての生徒に合うような環境設備や補助器具について研究をし、4年目以降は3年間かけて行った研究を発展するように学校を始動した。

【個人のニーズに合わせていること】

① 授業構成

シェルブリンクス学校の授業は、全てのクラスが授業の流れを統一している。見学した社会科の授業では、45分授業を「Uppstart」「Fördjupa & förklara(Deepen&explain)」

「Reflektion om lärande(Reflection on learning)」「Arbete pagår(Work pageant)」「Brain break」「Sammanfatta & blicka framåt (Summarize&look ahead)」「Avslutning(End)」の7項目の順に行っており、見学時には話し合いの様子とワークシートに記入している様子、ブレインブレイクの様子を見ることができた。話し合いでは、2つの国についてiPadで2分間調べた後にグループ内発表をしていた。そしてその後3分間でブレインブレイクの時間が設けられる。ブレインブレイクでは生徒が立ち上がり、お手玉のようなものを扱うことで脳を休めていた。このようにシェルブリンクス学校では授業を時間で分けることに徹底している。また、子どもの集中力は10分までしか続かないため、学校では教師が10分以上続けて話すことはなく、10分間で何をするか目的を明確にして授業を行っている。また、授業中はサンドイッチを食べても、ガムを噛んでも、帽子を被っていてもよい自由な環境である。



図1 教室の時間割



図2 社会科の授業の様子

シェルブリンクス学校では生徒が安心して生活ができるように様々な補助器具を用意している。

図 5 は重みのあるベストで、これを着用することで抱きしめられているような安心感を得ることができ、行動障害を持っている生徒も落ち着いて授業を受けるようになる。

図 6 は一般的な椅子の代わりにボール型の椅子を使用している様子である。一般的な椅子では長時間座ることのできない生徒も、常に動き続けるボール型の椅子に座ることで安心して授業を受けることができる。

図 7 は手で使うタイプの補助器具で、これらを触りながら授業を受けることが可能である。



図 7 手で使うタイプの補助器具

これらの補助器具は障がいを持っている持っていないに関係なく、全ての生徒が使用することができる。

④ チーム編成

シェルブリンクス学校では、教師が生徒たちをよく見ることができるよう、中学 1～3 年生それぞれの学年でチームを組んでいる。1 チーム 10 名の先生が 120 名の生徒を見ている。

⑤ 健康予防

生徒たちの健康予防のために、スウェーデンでは健康チームを組むようにしており、シェルブリンクス学校でも実施している。健康チームは校長先生、副校長先生、スペシャルティーチャー、カウンセラー、学校看護師、相談員、臨床心理士の 7 名から成り立っており、生徒に健康面で問題があった場合に教師が健康チームと相談することで改善に繋げている。

【自閉症と引きこもり】

引きこもりの生徒への対応（生活面）

シェルブリンクス学校では学校が子どもたちに合わせているため、自閉症の子どもたちが学校を嫌になることはない。例えば、引きこもりの子がいた場合、生徒がしたいことに教師が付き合うことで生徒と教師の信頼関係を築き上げ、生徒に学校へ来る気にさせる。具体的には、生徒がジムで筋トレをしたいという願望があった場合、教師は生徒と共にジムで筋トレをする等生徒のやりたいことに向き合う。また、生徒に安心感を与えるため、生徒が学校に来るようになっても授業への参加を強要することはない。

引きこもりの生徒への対応（学習面）

長年引きこもりをしていた生徒に対して、シェルブリンクス学校では学習面のサポートも手厚く行っている。過去の事例として、中学 3 年までの 5 年間引きこもっていた生徒への対応が挙げられる。

この生徒は高校生になるまで 1 年という短い時間しかなかったため、質の高い授業を実施することで同学年と同じクラスに戻れるようにした。この質の高い授業というのは、例えば「スウェーデン語で政治の党に関する論文を書く」ことで「スウェーデン語の勉強」と「政治の勉強」を同時に行うといった授業のことだ。



図 8 音が通りにくいソファ



図 9 雑音を通りにくくするヘッドホン

シェルブリンクス学校には引きこもりであった生徒のための特別クラスがあり、クラスの多くは自閉症である。ここでは通常クラスのように一斉授業をするのではなく、個別のレベルに合わせてそれぞれの時間割が組まれている。

このクラスには、図 8 のような周りの音を聞こえにくくするソファや、図 9 のような雑音を排除し、人の話し声のみを聞こえるようにするヘッドホンが置かれており、静かになる環境が整っている。

トゥンバ高校

日時	2019年2月20日(水) 8:30 ~ 14:00
訪問場所	Tumba Gymnasium (トゥンバ高校) (Utbildningsvägen 2, 147 40 Tumba)
訪問先担当者	松井久子先生
視察目的	スウェーデンの一般的な高校を見学。聖心の学生もワークショップを行うなど、現地の学生と実際に交流しながら視察を行った。
記録者氏名	高尾ひかる、齋藤理子

視察記録

8:30-9:40 Japanska 1 INDVAL 14名 「日本の文化 一衣食住に焦点を当てて」

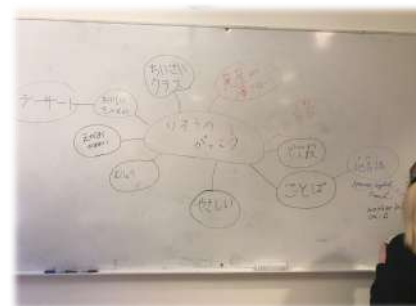
9:50-10:40 Japanska 2 HU17 8名 「日本の学校 一日本の四季に添って紹介」

Japanska 1のクラスは、美術や技術専攻の学生が多く、日本語を学習し始めて数ヶ月という学生が多いなか、私たち日本からの学生と簡単なコミュニケーションが取れる子も多く学習レベルが非常に高いと感じた。聖心生が行った「日本の文化 一衣食住に焦点を当てて」というワークショップでは、導入で折り紙の鶴を折り日本の繊細な文化に触れることができたのではないだろうか。



その後、パワーポイントを用いて、日本の文化を衣食住に焦点を当てながら、アニメキャラクターを取り入れて説明した。残りの時間では、聖心生と Tumba 高校の学生が日本やスウェーデンの教育について話し合う時間があり、両学生共に積極的に教育についてディスカッションを行っていた。聖心生は、高校生の軸のある意見や発想に衝撃を受け、自分たちの学生生活を振り返る時間にもなったであろう。

Japanska 2のクラスは、人文科学を学んでおり、日本語を学習し始めて2年目の学生たちがいるクラスでのワークショップであった。始めに、Tumba 高校の学生からスウェーデンの歴史や、Tumba 高校についてのプレゼンをしてもらい、次に聖心生から日本の学校行事や制服についてのプレゼンを行った。お互いの国、学校の特徴を知るという意味でも良い機会となったのではないかと感じた。その後は、「理想の学校とは」というテーマで Tumba 高校の生徒に様々な考えを聞かせてもらった。



”多言語”、中でも”母国語”を大切にしている生徒や”小さいクラス”であること、など様々な意見が出たが、スウェーデンの教育の特徴として見られることを理想の学校だと考えている生徒が多いという印象を受けた。なぜそう思うのか理由を聞くことで、私たちにとっても学校に対する新たな価値観を生むことができたのではないかと考える。

ワークショップを終えた後、松井先生、パウラ先生より Tumba 高校の説明、案内をしていただいた。Tumba 高校は、多岐に渡るカリキュラムがある。アニメーション授業や自動車を作る授業など個人の興味・関心を

広げることができる授業が多くあった。これは、職業教育の一環でもあのだろうか。さらに、日本にない、Tumba 高校のユニークなシステムを紹介する。授業を履修していなくても テストに合格すれば単位認定させるという制度だ。例えば、両親の都合で日本に滞在経験があり、日本語クラスのテストを受けたいという学生。テストを合格できれば、単位が認められるそうだ。このように、3年間の学生生活はただ一方的に学びを受ける環境ではなく、自主性を育みながら、自らの深めたい専攻課程に所属することができる環境が整っていた。



その後、4グループに分かれて「第2言語としてのスウェーデン語」「英語」「宗教」「導入コース (IM; 高校入学資格取得コース)」の授業を見学した。以下はそれぞれの授業の感想である。

クラス	見学者	感想
第2言語としてのスウェーデン語	UEMORI GORYO	想像と違っており、文字から始まるようなクラスではなかった。内容は「移民について」。初級クラスで、スウェーデンの文字のようなことをするクラスだと想像していたので、生徒たちがぺらぺら話していて驚いた。また、授業は、先生と生徒たちが笑いながら楽しく授業を行っていて、先生が主導の授業ではなく、生徒たちが意見をたくさん言い合うような感じで授業が行われていた。
英語	SAITOU・R SAITOU・N TSUJI	授業の流れとしては、「批判的なエッセイの書き方」という内容でいくつかのテーマについてグループでディスカッションを行うというものであった。生徒たち一人ひとりがきちんと自分の意見を持っており活発な印象を受けた。先生が各グループに入って一緒に話し合いに参加をしていたのも印象的だった。
宗教	SATO SHIMAZU	日本では宗教というと聖書や本から学ぶことを想像していたけど、死刑のプレゼンをしていて難しい内容だと感じた。倫理的な授業で想像とは違っていた。
IM	MATSUO TAKAO YAGURA YANAGISAWA	自閉症や発達障害を持つ学生が別の教室で行なっている少人数クラスであった。授業中の様子は、各自好きな席に座り、ガムを食べたり、歩き回るなどの行動も見られ、自由を意識されているように思えた。教室内も、集中できるような高い壁が動かせるようになっていたり、テーブルの形も数種類用意されているなど、一般クラスに比べるとユニークであった。



TG TUMBA
GYMNASIUM

ワーナー真由美さん宅 共有パーティールーム

日時	2019年2月21日(木) 17:00 ~ 22:00
訪問場所	ワーナー真由美さん宅 共有パーティールーム
訪問先担当者	ワーナー真由美さん
視察目的	スウェーデンの教育現場で働く方、子育てをしている方と交流を通して、スウェーデンの実際の教育について知る
記録者氏名	佐藤琴花 齋藤菜保

今回、交流の場を設けて下さったワーナー真由美さんは、高尾ひかるさんと共通のお知り合いの繋がりがあり、今回の北欧視察で交流の場を設けて頂けることになった。

ワーナー真由美さんは、スウェーデンの旦那様とご結婚され、お子さんがお二人いる。今回、ワーナー真由美さんのご長男とのお友達、ご友人のスウェーデンで教育関係のお仕事されている日本人の方にも、お話しをお伺いした。

(図1) 集合写真

(図2) ワーナーさんをご用意下さったご飯



はじめに現地の小学校で音楽の先生をされている、じゅん先生にお話しをお伺いした。じゅん先生からは、スウェーデンの子どもの権利を大切にしている教育や Norm と呼ばれる男女分けて教育を行わないことについてお話頂いた。権利のお話では、国連が定めている「子どもの権利条約」がスウェーデンではしっかりと守られている。子どもを大人が責任を持って育て、心身健康に生き、子どもが安全に守られ、子どもの意見が尊重される等の権利が認められている。自分のペースに合わせて休んだり、遊んだりすることも保障されていることを学んだ。

スウェーデンには教育要項という決まられたものが存在している。例えば、算数の授業で学んだことを社会の授業でも生かせるというようなものである。それは、1~3年、4~6年、7~9年の枠組みで設定されている。6年生の時に初めて成績がつけられるため、先生次第でどのように展開しても良いことに

なっている。生徒の影響力を重視した法律となっている。例えば、本を読むのが苦手な生徒がいる場合はiPadで援助する。また、課題を紙に書いて提出するのが苦手な児童がいれば、口頭で試験を受けるなど、生徒の方からやりやすい方法を選択をすることができる。また、世界でも平等が進んでいるスウェーデンでは、平等とは同じものを与えるのではなく、平等な目線にもっていくことだとスウェーデンの平等に対する考え方について教えて頂いた。スウェーデンでは子どものころから男女の区別を意識しないように育てられている。normという言葉の紹介があった。その単語の意味は、書かれていない決まり、定まっていないアイデアを指す。常に変わるものであるという意味がある。例えば、クラスの中でnormが存在していたら、それに気づかないといけないという日本では考えたことのない内容のお話であった。

スウェーデンではサラマンカ宣言が宣告された。それはインクルーシブ教育に値する特別養護施設と合同で行っているものである。健常児と障害のある方も一緒にランチを食べるため、特別視をしないことが当たり前になっている。日本ではそのような環境に置かれると、体の不自由な人がいると強く意識をしてしまいがちであるが、スウェーデンではそのような意識はまず持つことはないとおっしゃっていた。日本にもいつかはそのような固定概念を振り払える時が来てほしいものである。

日本とスウェーデンの子育ての違いについてお話しいただいた。スウェーデンでは、まずは自分でやらせる、挑戦させることに重きを置いている。自分で責任を持たせて、出来なかつたらどうするのかを自分で考えさせるようにしている。例えば、子どもが切符を自分で買いたいと思っているが初めて買うため、思うようにできないとする。日本であれば、並んで待っている後ろの人は早くしてほしいと怒り出すだろう。しかし、スウェーデンの場合、後ろに並んでいる方は子どもが自分の力で切符を買うことをやりたがっていて仕方がないから、待ってあげるという考えに至る。スウェーデンの国全体が子どものことを深く理解し、教育するための意識が高いことが分かる。



(図3) じゅん先生のお話の様子



(図4) 堀田さん、田中さんとのお話の様子

次に、現地で保育士として働いている堀田さん、保育園の副園長として働いている田中さんにお話をお伺いした。お2人からは、教育現場での驚く日本との違いについてお話して頂いた。

堀田さんは関西の高校で教師をされていた経験をお持ちである。そこで、スウェーデンに行って驚いたエピソードをお話しして下さった。日本で行われる体育は学年が上がるにつれて男女別々の授業が展開される。しかし、スウェーデンで行われる体育は、男女一緒に行われる。また、修学旅行では宿泊も男女同室で行われる。日本では考えられないものであるが、これは男女同意のもとで子どもの権利を

尊重して決められた。さらに、日本では子どもがかわいらしい服を着ていると大人は「かわいい服を着ているね」という言葉をついかけてしまいがちである。しかし、スウェーデンでは女らしさの強調と見なされ、男女のジェンダーを生み出しかねないと認識されている。このような言葉がけや教育方法によって、スウェーデンでは男女平等の社会が形成されていると感じた。

個人の尊重について、スウェーデンではみんな違っていい、違うことに意義があると考えている内容であった。日本と違うことは、心に余裕があることと、学校にかけるお金が違うこと、個を大切にしていることとおっしゃっていた。その3つを大人が理解をしていないと子どもたちにしっかりと教育をすることができなくなると考えをおっしゃっていた。また、日本は人権教育を受けていないため、教師自体が人権教育を行うことが出来ないと問題視されている。スウェーデンでは、それらのことについては既習しているため、日本との差を生み出してしまっていることが分かった。

移民については、スウェーデンでは移民であっても普通に学級の中に入るようにしている。別室で別の言語を学んだり、iPadを使う教材を用意したり、言語の音だけでも聞くように授業が行われている。ある事例では、セルビア人の9年生が移民してきた。学校に慣れてもらうことや学力を考慮して8年生に入ってもらった。その学年は思春期で繊細な性格であったため、周りから避けられていたようである。しかし、教師はその生徒のいいところを見つけて、活躍できる場所を作り出した。先生の工夫によって生徒は学校で自分の居場所を見つけられたという素敵な話であった。

スウェーデンでは少人数学級で行われている。少人数であることで、生徒一人一人に意見を聞きやすいという長所がある。印象的なお言葉だったのは、「生徒が実力を発揮できないのは先生のせいである。その問題を改善するのが先生の仕事である。」とおっしゃっていた。スウェーデンのテストでは、同じテストを2回行うことができる。2回行われることで、また努力して頑張れる機会が与えられる。また、年の終わりに大きなテストが実施される。これも2回行われるため、初回のテストで失敗してしまった場合、挽回することができる。このような策を先生方は日々考え講じられている。この話はテストに対する見方を広げた、とても印象的なお話であった。

スウェーデンの学校では転校することをお勧めしていない。各学校によって、授業の進め方やレベルが異なっているからである。その時に、田中さんは「先生次第で変わる。先生の力次第で子どもの力が変わる」とおっしゃっていた。日本でも教育に対して同様であるが、その言葉を聞いて先生の役割について改めて考えさせられた。

スウェーデンの学校に通っている日本人学生にも話を伺った。学校から支給されたパソコンを使って授業を受けたり、実際に作っているレポートの模様を見せてくれた。レポートを先生が確認したら添削やコメントをしてくれるようになっていて、日本で同じGoogleドライブを使用しているも使い方が圧倒的に効率が良いと感じられた。また、パソコンが破損してしまっても学校側が修理をしてくれて、パソコンを持ってくるのを忘れてしまっても学校にパソコンの予備が置いてあるため、いつでもパソコンを自由に使うことができる。日本にはまだそのシステムが行き届いていないため、感心し大変興味深かった。

スウェーデンに来てから、スウェーデン語や英語の勉強で大変ではないかという質問をした。返答の内容は学校で友達と話せないのが悔しくて、それを原動力に家に帰ってから言語の勉強をしたと話していた。また、環境が変わると自然とその言語にシフトチェンジされると言っていた。例えば、英語の授業の時間になると自然と英語の単語が頭の中に出てくるそうだ。語学はレベル別に展開されているため、

得意不得意があっても、着実に身につけていると話していた。一人一人に丁寧な指導が行き届いているからこそ、学力が着実に伸ばせることが可能だと学んだ。

スウェーデンでご活躍されている日本人の方々のお話を実際に伺って、大学の講義とは異なる発見が多くあり、視野が広まった。また、同じ日本人であるからこそ、分かり合える内容や心に響く印象的な言葉がたくさんあった。日本人が世界で頑張っている姿を見ることによって、私たちも今の現状に満足することなく高みを目指して努力していきたい。

グローバル・チャレンジ（民間のシンクタンク）

日時	2019年2月22日（金）	10 : 00 ~ 12 : 00
訪問場所	Global Utmaning(グローバル・チャレンジ) (Birger Jarlsgatan 58C Norrsken House)	
訪問先担当者	Mr.Kenneth Abrahamsson ブルギッタ先生	
視察目的	サステイナビリティーについて学ぶ	
記録者氏名	植森花	

視察記録

Global Utmaning(グローバル・チャレンジ 民間のシンクタンク)とは、

- ・社会、経済および環境の次元における持続可能な発展を促進する頭脳集団
- ・研究、ビジネス、政治と市民社会が協働するためのプラットフォームを築き、知識や経験を共有することで持続可能な社会への変容を加速するための政策提言の基礎づくりをすることを目的とする。
- ・対話、セミナー、報告書を通して、戦略的分析、政策的解決、意見などをとりまとめる国際的な接点となっている。研究機関や民間企業からのプロジェクト費によって運営されている。
- ・90人のシニア・アドバイザーによるネットワークがある。



←スカイプができるような部屋もある！

※建物名前は「オーロラ」という意味
→社会変革の場所として使われている

ケネット先生とブルギッタ先生

北欧の経済力が高くて、福祉が整っている理由は北欧モデルにあった！

【北欧モデル】

①労働モデル

→労働組合が政策提言できる環境が整っている

②福祉モデル

→インクルーシブ教育（難民・障がい者）

③市民社会モデル

→個人主義と社会主義のバランスを取る

→意見をオープンに言える環境

→民間団体に助成金を出している（北欧は、民間団体に入っている人が多い）

（世論調査：民間団体が必要だとした人は 77%）

労働・福祉の関しては国境をなくそう！北欧の協力が強まっている



【2015年の難民流入のはなし】

- ・大量の難民が流入してきた時、公的の機関が対応できなかった
- 一般の市民が対応！！
- 服やごはんを提供した

市民の役割

- ・政治家たちはパニックになっていた
- 市民団体が役割を担った！！
- 20代の法律を学ぶ女子大学生が「鉄道の弁護士」という団体を作り、弁護士を集め法律でどういう対応ができるか調べてもらった

社会的
イノベーション

「社会的イノベーションがたくさんあった」

- ・起業家が行ったこと！

①孤立しないようにアプリケーションを作った

サッカーがしたい
By 難民の方

集まろう
By スウェーデンの人

②仕事ができるようにアプリケーションを作った

マイナンバーが無くてもできる仕事を作った

Ex(家具の組み立て、草生しり)⇒(医者、ジャーナリスト、中東の音楽)
簡単なこと⇒ハイスキルの仕事

- ・不法就労とならないようにバックオフィスがビジネスとしてサポート

難民の方もスウェーデン人と同じように
社会保障を受けられるように政府に働きかけることに成功！

スタッドミッション・フォークハイスクール (民間の生涯学習機関)

日時	201年2月22日(金曜日) 13:00~15:00
訪問場所	Stadsmissionens Folkhögskola (スタッドミッション・フォークハイスクール 民間の生涯学習機関) (Sveavagen 41, ABF Huset)
訪問先担当者	ロースキュリンス校長 アンドレア副校長
視察目的	フォークハイスクールとはどのように取り生まれ、どのような目的を持ち運営され、実際
記録者氏名	五領 かしこ

○フォークハイスクールとは？

フォークハイスクールとは、大人のための生涯学習施設であり、民衆教育の一部で、18歳以上のすべての成人は誰でも入ることができる。

初めのころは、農村部が中心で大学レベルの教育を受けられない農民の人々にむけて開講されていた。

○民衆教育とは？

スウェーデンの民衆の自由な教育や学び、主にフォークハイスクールや学習サークルでの学びの理念で、一般の人たちで知識を求めていた人たちがいたという事実や中の願望に社会に何か影響を与えたいというもの、民主改革的な時代の流れもあります。

人々と知識のホリスティックな見方はボランティアに基づくものでプロセスは特殊なもので共同、議論、振り返りの3つからなっている。

参加者は、ともに作り出さす人で、市民団体とも深いつながりを持っている。

新しいニーズに常に柔軟である。成績評価は行わない。

フォークハイスクールは、全国に150校ある。コースは1年から3年のものもあれば、短期のものもある。大学入学資格が採れる

○Stadsmissionens Folkhögskola について

102年前に Buteljgatan (ビルカゴーデン) に設立された。1917年の冬のことであった。

当時、スウェーデンは世界の中で最貧国であった。飢え死にしそうな人が多くいて、革命が起きそうなほどだった。

Buteljgatan はストックホルムの中でも1番貧しい地域であり、失業者を助けることを目的として Stadsmissionens Folkhögskola は作られた。いまではいくつかに地域に存在し、スウェーデンの中では最も人気のある教育機関でもある。今は難民の人を多く受け入れているコースがあると同時に、SDGsに

も通組んでいる。ストックホルムの中では1番規模が大きくて、歴史も古いフォークハイスクールである。

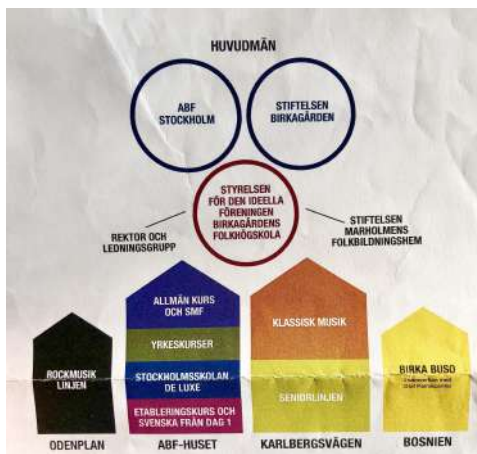


図1：学校の仕組みを示す図

<設立者> 2つの財団から成り立っている

ABF：労働運動の一部 市民の権利の教育 → 学習サークルやレクチャーも行っている
 ビルカゴーデン財団（基金）キリスト教の財団から始まった

<コース>

- ：ロック音楽（60人）応募者は1000人。その中から選ばれる
- ：職業コース
- ：特別支援教員育成コース
- ：障害者施設のヘルパー
- ：アート
- ：難民のためのコース（認定中と認定済みの方向けにそれぞれある）
- ：クラシック音楽
- ：高齢者向けのコース（1番人気なのは1つの国を1年学び、訪問するコース）

<現状>

- ・20-25歳の方が多く通っている
- ・フォークハイスクールに来る学生は、様々な目的によって来るため、個人で違う
- ・授業時間は8時半から3時半（高齢者は1週間に2日4だけ）
- ・運営はスタッドミッションが主体となっておこない、すべての人により人間的な社会を構築することを目的に1853年から活動している。
- ・異なる年齢集団、異なる背景をもつ人々が、個を重視する安全な環境のもとで学び合う。
- ・授業料は無料。ただし教材費が1学期につき700クローナ(約9000円)かかる(通信制の場合は390クローナ)



図 2 : 講義後にはフィーカ図 :



図 3 : 講義を受けた教室にて



図 4 : 校内の様子



図 5 : 様々な掲示物



図 6 : 休憩中の学生



図 7 : 校長先生と副校長先生



図 8 : 講義中の様子



図 9 : 講義はすべて英語

2. 個人感想

北欧視察旅行に参加して

齋藤菜保

私はこの北欧視察について以前から興味があった。思い出してみると聖心女子大学入学前の高校生の時からである。聖心女子大学で教育学科に進みたいと考えていた高校生の時にホームページで2016年度の北欧スタディーツアーの掲載を見た。その情報を知って、海外の教育の現場に行くことで知らない発見がたくさんあると感じ、大学生になったらいつか参加してみたいと夢見ていた。その夢が大学3年生の時に叶えられてとても嬉しく思っている。

この視察を通して改めて感じたことは、多くの方のご尽力のおかげで視察が成り立っていたということである。澤野先生やスウェーデン語を翻訳してくださったエーミルさん、現地で案内をしてくださった方、旅行会社、各学校の先生方のお力がなければ多くの学びと発見を得ずに安全に日本に帰国出来なかった。そして私はこの視察に参加するのが遅かったのにも関わらず、快く受け入れてくださったことに感謝している。

日本に帰国してから、より深くスウェーデンの教育の充実度の高さに感動している。スウェーデンは教材費が全て税金によって免除されている。私は東京の小学校に週1回ボランティアに参加しているのだが、とても短い鉛筆を使っている生徒や糊がなくなって友人に借りている生徒を見ると、スウェーデンの学校ではそんなことは起きないのだろうと感じてしまうことがある。そして、スウェーデンの小学校は少人数教育が充実していて且つ先生の動員数も多いため、とても手厚い授業が施されている。授業に付いていけなくて困っている生徒が多くいる中で35人の学級を先生1人で必死にやり繰りしている姿を見て心を痛めた。さらには、スウェーデンの学童保育中に宿題を行ったり、その日の授業の復習を行っている。日本の学童保育では、支援員は学校の宿題を教えるはならないと決められている。子どもたちが勉強に集中していない姿を見ると悲しい気持になる。日本には日本なりの教育に対する考え方や方法が存在するため全てを否定していけないことは重々承知しているが、海外の教育を学んでから日本の教育について考えさせられることが増えた。スウェーデンのように教育大国と言われる日本社会が行われるようになることを願っている。

初めて行った北欧であり、行く前には盗難についてなどの話を聞いていたためとても不安であったが、無事に視察が終えられて本当に良かったと思っている。海外旅行はこれから先、行こうと思えばいくらでも行くことが出来るが海外の学校見学は中々出来ない。今回感じたことを忘れずに、学んだことを今後の自己形成に活用していきたい。

想像力

五領 かしこ

アルフレッド・ノーベルの言葉にこのようなものがあります。

‘If I come up with 300 ideas in a year, and only one of them is useful, I am content’

スウェーデンの教育はこのような言葉がぴったりの教育が行われています。

まさに、生徒一人一人の ideas を大切にし、その中の輝く idea を教師が共に見つけていくような形です。教育の形には正解などはありませんが、子供たちが、自分自身や自分の中に眠っている idea を大切にしていきたい！と感じてもらいやすい環境が整っていました。勉強はやらされるものではなく、自ら意味を見つけ、深めていくことによって、自分のものにしていくことができます。様々な工夫が行われ、日本との教育の差を感じましたが、私が特に衝撃を受けたお話があります。それは、1960年代に創設されたシュタイナー教育を行っている Kristofferskolan という学校訪問でのお話です。

Kristofferskolan では、小学1年生から中学3年生まで工芸を通して人間的な発達を実体験できる学校になっています。学習の本質や目的をしっかりと捉えた先生が、本を製本する授業を行っていました。



図1：製本の完成形



図2：生徒の作った教科書

Kristofferskolan の先生はこのようにお話されていました。

「我々にとってなによりも本がたいせつである。西洋の本も、東南アジアの本もつくる。どっちが良い！とかではなく、こんな文化もあり、あんな文化もある！と理解できるようになるためです。文化の発達や研究の発達には本が不可欠であるから、本がどのようにできたかを、しっかりとわかる必要がある。本には紙が使われていて、本は植物から作られている。そのため、製本を行うことによって、すべての物事に自然と興味関心を持って学ぶことができるのです」と。

例えば次のような例です。

西洋： 麻 だから、厚くなる 鳥の羽で 書いていたから硬くてもいい。

東南： 筆で書くから柔らかい紙がいい。

環境や、歴史、特産品、他国との繋がり、時代背景が西洋と東南の紙の作られ方の違いからわかります。

また、生徒は自分自身で教科書を作成していきます。なぜなら、Kristofferskolan では、みんな同じ教科書をつくるべきじゃないと考えてるためです。ほとんどの教科書は、想像力や自由を制限してしまっていえ、生徒の自由な想像力を潰してしまうからだそうです。

1つ1つの物事に意味があり、歴史がある。物事の本質をとらえることができる授業がおこなわれていて、感動しました。

未来の担い手

柳澤 郁

日本の未来を担うのはなんだろう？誰だろう？最初にこの質問を投げかけておきたい。

北欧の教育機関を視察するのは今回が初めてだったけれど、国としての子どもに対する視点やお金のかけ方、根本的なものの見方が日本とあまりにも違いすぎていて、スウェーデンでの教育方法を日本にそのまま取り込むということはほぼ不可能だと思う。それを日本の教育現場で実現するなら、私立として自分で学校を作るしかないという印象。

スウェーデンが持っている教育に対する考え方は、「学力レベルが低いんだから上げなきゃならない、上げるためにはより多くお金をかけるのは当然のこと、だってそのほうがすぐに対応できるでしょ」というもの。だから IT 教育だってどんどん活用するし、生徒はほとんどが 1 人 1 台パソコンを持ってる高校生の段階でかなりの PC 技術も身につけている。日本も IT 教育に対する抵抗をもっとなくしていくべきだと思うし、そうすれば問題になっている日本の教員の労働時間だってだいぶ減らすことができる。型にはまった教育理念をそろそろ変えていかないと、日本の教員は自分で自分の首を締めているようにしか見えない。

子どもにお金をかけない国に未来はないという話はよく聞くけれど、本当にその通りだなあと今回の研修で痛いほど感じた。スウェーデンの様々な制度を知ってしまうと、日本で子どもを産むことってリアルに地獄。親にとっても子どもにとっても。こんな国に子どもを産み落とすことも、産み落とされることもかわいそうに思えてくる。少子化になるのは必然。かと言ってわたしなんかにはできることもないしなあ。スウェーデンいいなあ。スウェーデンで働きたいなあ。ってスウェーデンの教育の実態を知ってしまったら誰もが本当にそう思うはず。

教育現場の労働環境も日本とは比べものにならないほど、教員ひとりひとりを思いやる制度が整っている。もちろん教員が不足しているとかの問題はあるけれど、その他の教育に関すること、例えば統合教育だったり、少人数教育だったり、日本とは到達しているレベルが違う。日本は明らかに低い。海外からは、あんな国恥ずかしいって思われている。

若者の問題意識の持ち方も全然ちがう。日本は低レベルというか、自分自身も含めてではあるけれど、子どもが社会に目を向けるきっかけとなるようなロールモデルが日本には本当に少ない。スウェーデンの高校生は選挙に行くのが楽しみなんだって、え、すごくない？今年で 22 歳になるわたし、未だに一度も選挙に行ったことがないのだけれど、本当によくないことだって反省したし、すごく恥ずかしいことなんだって実感した。つまりは、そのくらいスウェーデンの高校生は民主主義教育をたくさん受けていて、平等や差別に対する思考や捉え方が日本とはちがうということ。

様々にスウェーデンでの教育について述べてきたけれど、現地の教育機関を実際にこの目で見ていちばんに感じたことは、国も、地域も、大人も、子どもの存在の捉え方が日本とは明らかに違うというもの。いくらスウェーデンの教育現場が魅力的に思えたとしても、今わたしは日本という国に生きている。日本が最低な国だと言われるのはやっぱり悔しい。日本の未来を担うのは"子ども"だと誰もがいちばんに言えない国に、わたしたちは生きているということをもっと多くの日本人が知る必要があると、わたしは思う。

スウェーデンの子育て

佐藤 琴花

今回の北欧の教育視察を終えて、初めて見る男女平等の子育て社会に感銘を受けました。そして、自分が将来どんな大人になりたいかということを考えさせられる旅になりました。

訪れたスウェーデンの教育現場では、子どもの個性を重視した教育や子どもの権利を守る教育現場を見ました。子ども個人を尊重するスウェーデンの教育を受けた生徒たちは、話をする場でも自分の意見や考えを持っていて、少し話をしただけで、しっかりしている印象を感じました。スウェーデンの教育は、子どもであっても個人であり、教育で個人を伸ばして、自立した大人にする教育であると、この視察を通して感じました。

また、スウェーデンで子育てをする環境も教育現場と同じで、子どもを個人として育てているという話をスウェーデンで、子育て中のお母さんに伺うことができました。スウェーデンでは、子ども自身に関する意思決定を子どもに任せ、親は子どもの安全や可能性を支える役割を担っていました。また、大きく日本での子育てとギャップを感じたのは、男性の育児参加でした。スウェーデンは、世界でも男女平等が進んだ国です。子どもの頃から男女分けて何かをしたり、考えたりしません。同性婚も認められているので、親が同性である場合もあります。そんなスウェーデンでは、家事や育児は父親も母親も半分で行っているそうです。この旅行では、男性がベビーカーを押して歩いている姿を多く見かけました。男性も仕事をしていても、子どもの迎えに行ったり、クラブのコーチをしたりするそうです。これは日本の子育てとはかなり異なり、子育てを将来したいと思う私にとって羨ましい環境だと思いました。訪問先の小中学校で、一緒にお昼を食べた小学生の女の子に将来の夢について聞きました。お医者になって、病気の人の役に立ちたいという答えでした。それを聞いて、立派な将来を考えている子どもに感動しました。続けて、私も将来何になりたいのか逆に質問されたのですが、就活を目の前に将来何になりたいのか、現実を考えてしまって、その答えを返すことが出来なかったのが今回すごく後悔した点です。この後、この旅の中で、ずっと自分が将来何になりたいのか考えました。子育てに元々関心があり、お母さんになりたいと思っていたけど、お母さんになりたいだけで、どんなお母さんになりたいのかわかっていませんでした。しかし、スウェーデンで色んな教育環境を見せていただいた中で、少しずつ分かってきました。

スウェーデンでの日本とは異なる子育てを知るうちに、スウェーデンのような環境で子育てをしたいという思いや子どもに対して、子ども自身の可能性や経験を応援する母親になりたいと思いました。スウェーデンでの実際の教育に触れて、すごく刺激を受け、将来のビジョンを考える良い機会になりました。

た。それから自分もまだまだ可能性があり、学んでいくことが必要だと思います。北欧の教育視察を終えて、自分を見つめながら、未来を見る教育に魅力を感じました。スウェーデンの風景や料理も美味しく、スウェーデンかなり良い旅になりました。

全ては「子どもの権利」の元に — 日本と比較して —

高尾 ひかる

「愛とは」何か、これを考えたときに何を思い浮かべるだろうか。スウェーデンに訪れて1校目のグリムスタスコーラン・公立学校（移民の多い学校）のスウェーデン語クラスでこのような授業が行われていた。子どもたちがボードに書きはじめた。そこに書かれていたのは、“心配” “言葉・いい事” “学校にいる友人” など、私の脳内で考えていた一歩も二歩も先のものでした。このクラスを受けている生徒は、戦争から逃げてきた子や一人でスウェーデンにきた子など、移民・難民として入学してきた子どもたち。この第二言語クラスを訪れ、進んでいる「教育体制」を五感で感じられることができたのと同時に、スウェーデンへのときめきの始まりになった。スウェーデンでの教育、子育てにおいて一貫して言えることは子どもたちの自立・自主性が大切にされていること、そして、子どもの成功体験を大切にしていることだと思った。私たちが子どもの頃、食卓でどのような会話がなされていたであろうか。政治や環境問題について家族と討論していただろうか。これらの一見難しいお題であるものを中学生、もしくは小学生以下から疑問や関心を持ち議論しているのがスウェーデンでの日常であった。また、子どもたちは、肌の色や話す言葉・文化が違えど、尊い宝物のように見えた。彼ら、彼女らの脳内には差別という言葉そのものがないのかもしれない。そのため、日本で今問題となっている「教育格差」などはあり得ないものであろう。裕福であるか無いかなど、子どもたちには関係ない。スウェーデンではどの学校でも真の意味で、『子どもの権利条約』を理解し、実行していた。子どもたちの個性や興味を尊重し、それをサポートする制度が充実している。この体制が整っているのは、教師がクラスという集団で見のではなく、一人ひとりを見ているからであることを知った。このような環境だからこそ、私が小学生から高校生の間で目にしてきた、教師が教卓に立ち生徒を叱るという状況は考えられないものだと痛感することもできた。また、近年日本でも意識が向けられている障害を持った子どもたちについての制度で感銘を受けたことを紹介したい。現代では子どもの4人に1人が障害を持つと言われている。それは、目に見えないものが多いであろう。その特徴を持った子どもたちに対して学校は、どのような環境を提供しているのか。私が訪れた学校の多くが、その生徒たちのためのカリキュラムや安心できる環境が整っているなど、システムの柔軟さと子どもたちへの尊重の想いが終始伺うことができた。



この文章に記載させていただいたものは、ほんの一部に過ぎない。教育環境についてだけでなく、一人人間として、先方でお世話になった多くの大人の方たちとの交流ができたからこそ、人生100年時代と言われる今日において自らの人生設計を見直すことができた素敵な時間となった。この経験を大切に、さらなる実りある学生生活を送っていきたくと心底思えた。

本当の意味でのインクルーシブ教育

齋藤 理子

インクルーシブ教育がスウェーデンで進んでいること自体は知っていたが、今回の研修を通して具体的にどんな形で行われているのか理解できたことは、とても貴重な経験だったように思う。中でも、特に障がい者統合教育に力を入れている学校での実践が印象に残っている。授業中の生徒たちを観察していると、授業の途中で「brain break」というリラックスする時間があったり、様々な補助器具が用意されていて、どんな子でも集中できる環境、自分に合った学び方ができる環境が整っていた。環境づくりをここまで作り上げることができ、生徒が生き生きと学びに向かっているのはなぜなのか。それは、インクルーシブに対する捉え方や意識の問題だと感じた。授業の後、校長先生が私たちに教えてくださった考え方や価値観に、私自身とても感動を覚えた。「通常は、第一に健常者のことを考えているけれど、ここでは障がいのある子を第一に考えている。その子たちに合わせた環境づくりは、誰にとっても使いやすくなる。」通常は逆三角形で大多数に合わせて考えられているものを、三角形の考え方ですべてのものが作られていて、誰にでも使いやすい環境とはこういうことなのかと気づき、発想の転換の大切さを、身をもって感じる事ができた。

一方で、スウェーデンで実践されていることを日本でそのまま取り入れることの難しさも改めて感じた。何よりも、本当に実現するには時間がかかるのではないだろうか。それは、「根本的な思考の転換」が必要であると感じたからである。今回の学びを通して、一番大切なのは教師がどれだけインクルーシブに対する知識や柔軟性を持っているかだと気付いた。「人によって違うのは当たり前」「みんなが特別である」という考えを大人が持っているからこそ成り立つ教育ではないかと思った。また、教師の数が足りなかったり、多忙から生徒一人ひとりをしっかり見れない現状もあり、物理的な問題からも簡単には解決できないものであると感じた。現地での学びや日本の現状を踏まえて、これからどんな学校づくりをしていく必要があるのか、今後も追求していきたいと思う。

これらスウェーデンでの貴重な経験や、新たに生み出すことができた価値観を無駄にすることなく、自身の卒業論文、そしてこれから将来を考えていく上で大切にしていきたい。そして、スウェーデンの生徒たちから学んだ、常に考え、自分の意思をしっかりと持って伝える心を大切にしたい。

教師の労働環境の違い

辻 香穂

私は、スウェーデンで行われている教育にとっても関心があり、教育現場を自分の目で見たいと思い、このスタディツアーに参加した。結果、思っていた以上にスウェーデンの教育は素晴らしく、より一層興味が湧いた。私が思ったことは、教師の労働環境、教育観が日本とスウェーデンでは全く違うことだ。

日本では教師の多忙化や人間関係が問題になっている。しかし、スウェーデンの学校では職員室のような部屋もなく、書類でごちゃごちゃになっている机や廊下を忙しく歩いている先生もいない。日本よりも教師思いな環境が整っているのである。例えば、かがまなくていいオムツ交換台、自宅のような職員室やアシスタントティーチャーの活用など。心に余裕があるからこそ、子ども一人一人と向き合い、

時間をかけて人を育てていけるのだと改めて感じた。労働環境が整っているからこそ、教師は質の良い教育を創り出せるのではないだろうか。つい先日、幼保無償化の制度が導入されたが、保育者がいなければ、子どもを保育をすることは不可能である。その保育者をどのようにして確保するのか、労働環境をどのようにして向上させるのかが大きな問題になってくるのではないだろうか。

日本の学校では主なポイントとして勉強を教える、学力を上げるや順位を決めるよう教育を行っているが、スウェーデンの学校で私が感じたのは人間の心を育む教育をしていると思った。スウェーデンは移民の受け入れにより、多民族国家になっている。そこで、子どもたちが、人種差別をしないように・男女平等の考え方を育てるように、当たり前だけどできないことをスウェーデンでは当たり前に行っている。かつて、スウェーデンでも女性は専業主婦が当たり前であったが、不況をきっかけに女性の社会進出が進んだ。日本でも、女性の社会進出が盛んになってきたが、スウェーデンほどではない。まだ、“女は家を守るのが仕事”と思っている人も多いのではないだろうか。この考え方を取り払うためにも、教育の力が必要だと思った。

スウェーデンは教育に関する観点・重さが日本とは全く違った。日本の憲法で決まっている通り、子どもを学校に通わせることは”親の義務”であるが、スウェーデンでは子どもが学校に行くのは”子どもの権利”である。学校は誰のためにあるのかを国家全体で理解しているのである。だからこそ、子どもの教育費は全て無料で、生涯学習のための設備も整っており、国民全員が無料で通える権利がある。学びたい意欲を金銭的理由で奪われることがない。

スウェーデンの色鮮やかな教育現場

矢倉 万瑤

スウェーデンは至る所が色鮮やかであった。街中だけでなく、訪れた教育機関一つ一つも、美術館の一部屋一部屋もである。色鮮やかな場所を訪れる度、私は心が踊った。そしてこのような貴重な機会を無駄にしないよう、また今回の学びや経験等を何かしら将来に活かせるよう、一日一日を大切にしたいと強く思った。

7泊9日のうち、私の心が最も躍った場所は、レッジョ・エミリア方式の保育を取り入れていた幼稚園である。日本の幼稚園、北欧で盛んな森の幼稚園やシュタイナー教育を行う幼稚園等、様々な方法で保育を行う幼稚園を大学にて学んでいる中で、レッジョ・エミリア方式の保育を行う幼稚園を訪れることが出来、保育方法やその他様々な分野についてのお話を伺うことが出来たのはとても貴重な機会であった。

この幼稚園は園舎、決められたテーマごとに分けられている保育室内、その保育室内に置かれている玩具等、様々な部分や物が色鮮やかであった。特に玩具のうちのお人形は、肌の色や髪色、お人形が着ている洋服の色が鮮やかであり、かつ豊かであった。このような環境下で育つ子どもたちは、恐らく大人になってからも当たり前のように異なる国籍の人たちが同じ地球や国々に存在していることを理解し、その人たちと躊躇うことなく関わり合うことが出来るのではないかと思った。またお人形以外にも、絵本のコーナーでは一冊の絵本に対し、様々な国の言語でその絵本を読むことが出来る QR コードが壁面にあった。このように異なる背景を持つ子どもたち一人一人の居場所作りや環境が用意されていた。様々

な背景を持つ子どもがスウェーデンの文化等に合わせているのではなく、その子ども一人一人の国や文化が尊重され、かつ守られていることが分かった。このような環境下で育っているからこそ、この園の子どもたちは元気いっぱい寒い季節でも園庭で遊んだり、保育者や他の園児とも良い関係を築きながら、楽しい園生活を送っている様子を短時間の訪問からも感じ取ることが出来たのではないかと思う。改めて今回の研修を通して、子どもにとっての環境作りの大切さについて学ぶことが出来た。引率して下さった先生方、一緒に学ぶことが出来た仲間たち、その他スウェーデンにて関わって下さった方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

自立を促す国スウェーデン

島津 朱里

スウェーデンは若者の政治意識が高く、国全体の投票率は八割を超えています。なぜ投票率が高いのか？どのように政治に関心を持たせているのか？私はこのような疑問を持ち、今回のスタディーツアーに参加しました。参加してわかったことのひとつに、学校の政治意識が高いことが挙げられます。

スウェーデンの高校では社会科の時間に「政治」という分野があり、半年間かけて学びます。その授業の中で生徒たちは各党に分かれ、それぞれの党について生徒が調べて討論をしたり、実際に政治家の討論を見学する機会を設けたりしています。また、学校で模擬選挙を行ったり、若手議員とその党に賛同する若者から構成される政党青年部を学校に招いたりしているそうです。このように学校が積極的に政治の場を設けているため生徒たちの政治意識が高まっているのではないかと思います。

しかし、政治意識が高い理由は他にもあると、このスタディーツアーを通じて考えました。それは、スウェーデンの子どもたちが自分の考えを持てるような教育を家庭、学校を始めとする社会全体が行っていることです。

私たちが訪れたどの学校、幼稚園も給食はビュッフェスタイルで、自分で食べる量、物は自分で決められるようになっています。また、自分のことを自分でできるように、三日目に訪れた Lilla Tensta 就学前学校では一人で交換できるオムツ台が置いてある等、子どもたちの自立を促す環境が整っていました。家庭でも、子どもたちが失敗を恐れないように「失敗してもよい」という雰囲気を作ったり、食卓で政治のことや社会問題に関する会話をして「あなたはどう考えるの？」と問いかけたりしているそうです。スウェーデンは、社会が子どもの権利を保障しているため、親でも子どもを叩くと通報され、子どもが成績を親に見せたくないと言えば学校は親に見せてはいけません。それほど、子どもの権利が守られています。一方で、子どもの行いは自己責任となるため、子どもが校外で喫煙をしても学校は一切口出しをしないという厳しい面もあります。このような教育を受けているため、自分の考えが生まれ、政治に関する考えも深めることができるのではないかと考えました。

今回のスタディーツアーを通じて、日本の制度もスウェーデンの様であつたらいいのに、と考える場面が多々ありました。しかし、そのままスウェーデンの教育を日本に持ち帰ることは難しいことだと思



図1 Tumba 高校で見かけた政党青年部

います。その中でも何か還元できることはないかと考え、挙げられるのが「スウェーデンの教育に対する考え方」です。スウェーデンは教育を「子どもたちを尊重し、良い面を伸ばすこと」と捉えています。

例えば、音楽の成績評価では基準を「コードの楽器を弾けること」として、ギターでもピアノでもその子が苦手ではない方を評価しています。文字を書けない子どもがいたらテストは口頭でします。このようにスウェーデンの教師は子ども一人ひとりが能力を発揮できる方法を探し出します。

今回の研修を通じ、私もスウェーデンのようなオルタナティブを多く用意できる大人になりたいと強く思いました。大きなことを日本の教育に還元することはできないけれど、将来教育に携わる者としてスウェーデンで得た知識や経験を少しずつ還元していきたいと思います。

多様な学びへのアプローチ

松尾 智子

これまで日本の教育を外国と比較することがなかっただけに、今回のスウェーデンでの研修は自分の知見が広がるとても貴重な経験になりました。スウェーデンの教育の根底にある「子どもは国の財産」という意識が教育環境に反映されており、教育にかかる費用全てが無償という点をはじめ、子どもが教育を通して「なぜ・どうして」を自分で見つけ考え問題を解決していくためのフォローアップを教員が的確に行っていたことなど最先端の教育の様子がどの教育現場でも見られました。今後の21世紀社会を生き抜くためには自らが様々な分野において問題や課題を見つけ、解決策を考える力が必要になってきます。社会や時代がどのような人間を必要としているかを把握し、教育を通して子どもを成長させることが、日本の教育には求められており、子どもの教育に携わる者の使命だと感じる事ができた、そんな研修でした。

スウェーデンの幼稚園から高校まで幅広く学校を視察していく中で特に印象的だった学校が、シュタイナー教育を行っていた小学校です。小学校とは思えないほど学習用具や学ぶ環境、専門的な知識を持った教員が充実しており、アートを通じて学んでいる環境に感動しました。美的感覚は芸術のみならず、様々な分野で必要になってくる感覚です。創造性を育み0から1を生み出す力を養います。幼少期からそのような学びができる環境に身を置けることはとても素晴らしいことだと感じました。学びへのアプローチ方法が多様で、個々の持つ能力を生かしたアプローチができることをシュタイナー教育から感じました。また、苦手な分野の学びも得意な分野からアプローチすると苦手意識を軽減して学びに取り組んでいた様子が見られました。子どもの能力・才能を伸ばすには、教育の多様性が必要なのだと感じました。

全く違う価値観に触れることができた 1 週間

植森花

「自分の意見を持ち、言える人になろう!」スウェーデン・スタディーツアーを終えて決心したことです。この時期、このタイミングでスウェーデンの教育や考え方に触れたことは、とても良かったと思います。自分が変わろう!と思えるきっかけとなりました。スウェーデンの授業では、生徒たちが活発に発言していたことが印象的でした。特に、トゥンバ高校で参加させていただいた、第 2 言語としてのスウェーデン語の授業では、先生がほとんど入らずに生徒だけで文章に対する議論が行われていました。何を言われずとも自分の意見を言えるように するための教育が行われてその状況はとてもかっこよく見えました。私は、なにか新しい知識を得ても理解するだけで、それに対する意見を持ってこなかったように感じます。批判すること、賛成することそれぞれ全てに理由をつけることが大切だと思いました。ワーナーさん宅に行かせていただいた時にも、エミールくんたちが 1 つ の話題から会話を大きく広げているところを見て、そのように感じました。

スタディーツアーに参加する前は、進んだスウェーデンの教育方法を持ち帰り活かすことができると考えていましたが、スウェーデンと日本では、教育制度や人口が異なりすぎるため、スウェーデンのような教育を行うことが難しいと感じました。しかし、子どもに関する考え方については、学べるが多かったです。スウェーデンでは、子どもが第一だと考えのもと日々が回っていると感じました。

シュタイナー式の学校に行った時も、「社会に出て困らないように、なんでもできるようになって卒業させる」というお話を伺って、ただ勉強を教えるだけではなく、その子どもたちの将来のことを見越しての教育を行っているのだと感じました。また、統合教育の学校に行った際も、すべての子どもに対し支援が必要です。ある子は、特別な支援が必要なだけだとお話をされていて、まさにインクルーシブ教育の考え方であり実践だと感じました。先生方が子ども可能性を信じて、子どもと接している様子に感動しました。日本では、ベビーカーをバスに乗せると嫌な顔をされて、母親の子育てのやりにくさが問題となっています。スウェーデンに行き、そもそもそんな問題が発生すること自体が不思議で、日本の不寛容社会を改めて実感しました。大きくは変えられないとしても、子どもの大切さについては伝えていきたいと思いました。

このスタディーツアーは、毎日が学びであり発見でありました。通訳を担当してくださった、エミールさんをはじめとして、すべてのツアー関係者の皆様、引率してくださった先生方、一緒に同じ時を過ごしたメンバーに感謝でいっぱいです。

子ども一人ひとりが大人になるまでの教育とそれを支える体制にふれて

教育学科 准教授 加藤洋子

北欧のスタディツアーで学生たちは、実際に様々な教育機関と施設を訪問することを通して、スウェーデンにおける教育や制度、そこで暮らす人々の考え方や文化等にふれることができた。スタディツアーに参加する前の事前勉強会では、澤野由紀子先生のレクチャーを受けて、絵本やスウェーデンに関する著書、論文を読み、また、スウェーデン大使館でのイベントに参加をして、学生と同行する教員も一緒になって学習を進めた。

私は、昨年の春に本学に着任いたしましたので、今回、教育学科のスタディツアーに初めて参加させて頂きましたが、学生たちが自分たちの興味・関心のある部分を日本で詳しく調べ、学ぶ視点を明確にして、スウェーデンに訪問した際に、様々な角度から現地の先生や専門職の方々に、質問ができるようにと何か月も前から準備を進めていたことが分かった。そのことにより、現地で、深く学ぼうとする意識がさらに高まり、9日間のスタディーツアーの中で、できるだけ多くを吸収しようとする学生の姿や意欲につながったことを理解した。

就学前の子どもたちが通うプリスクール、小学生が通う学童保育、小学校、中学校、高校、成人教育・職業教育の場に訪問して、子ども一人ひとりが大人になるまで、また大人になってからも学ぶことができるシステムが、スウェーデンでは構築されていることに、私自身もとても衝撃を受けた。一人の人間を社会に送り出すための切れ目のない手厚い支援がそこにはあり、日本で整備されている教育システムと形としては同じ部分はあるが、その概念や実施している内容には大きな違いを感じた。

人は多様であるという考え方が人々の生活の中の根底にあり、その上で教育システムやそれを支える体制が組み立てられていた。例えば、移民への言語教育（母語・スウェーデン語・外国語）、そして、様々な背景を持つ人々に対応でき、彼らのニーズを受け入れていくシステムがあった。学校では子どもたちに携わる教員も多く、ソーシャルワーカー、カウンセラー、看護師、医者など、一緒に働く専門職が配置されチームで、子どもと家庭を支える体制が作られていた。インクルーシブ教育やその設備も充実しており、障がい児や特別な支援が必要な子どもに対する環境について、随所に工夫があり、試行錯誤しながら整備し続けていることが分かった。

学童保育では、子どもたちの通っている学校の教員と学童保育の教員が一緒になり、子どもの学びや個々の子どもの家庭環境を含めた生活環境を把握していることも理解できた。ひきこもりの問題を抱える子どもたちへの支援についても、子どもの状態に合わせ中学・高校で手厚い支援が行われていた。いじめ、虐待の問題に対しても、問題が発生したときに、まずは学校において、教員・専門職合同のチームでの迅速な対応が行われており、深刻化する前に予防、早期介入の時期で問題を解決できるシステムが整えられており、同時に教育機関以外の行政機関（警察・福祉機関）へも連携を取りながら対処していることが分かった。

特に子どもにかかわる教員・専門職が生き生きと仕事をしている姿も印象的であり、労働環境の整備もあると思うが、一方で、大人になっても学ぶことができる、職業や生き方の方向を変えることができるシステムが組み立てられていることが大人の気持ちの余裕に繋がっているのではないかと感じた。また次の世代のために子どもたちを丁寧に育てていくことに十分予算をかけ、社会全体で行う子育てが

当たり前に行われている社会についても、どうしたらそのようになれるのだろうと学生たちと訪問後の道すがら話をした。

今回の訪問では、スウェーデンに住んでいらっしゃる日本人で、教員をされている方、高校生のお話も聞かせていただくことができ、学生にとって有意義な時間を過ごすことができ、次への関心に発展できたのではないかと感じている。

今回のスタディツアーでの学生の学びを支えてくださった各学校・施設の皆様、案内と通訳をしてくださったエーミルさん・鈴木さん、関係者の方々に心より感謝申し上げます。



イノベーションとソーシャル・デザインを生み出す土壌

教育学科 教授 澤野由紀子

聖心女子大学教育学科の研修として北欧スタディー・ツアーを実施するのは、2016年2月と2017年2月に続き今回が3回目となった。スウェーデンは私の比較教育学の研究フィールドの一つでもあり、とくに首都ストックホルムには知人が多く、土地勘もあることから、毎回訪れている。

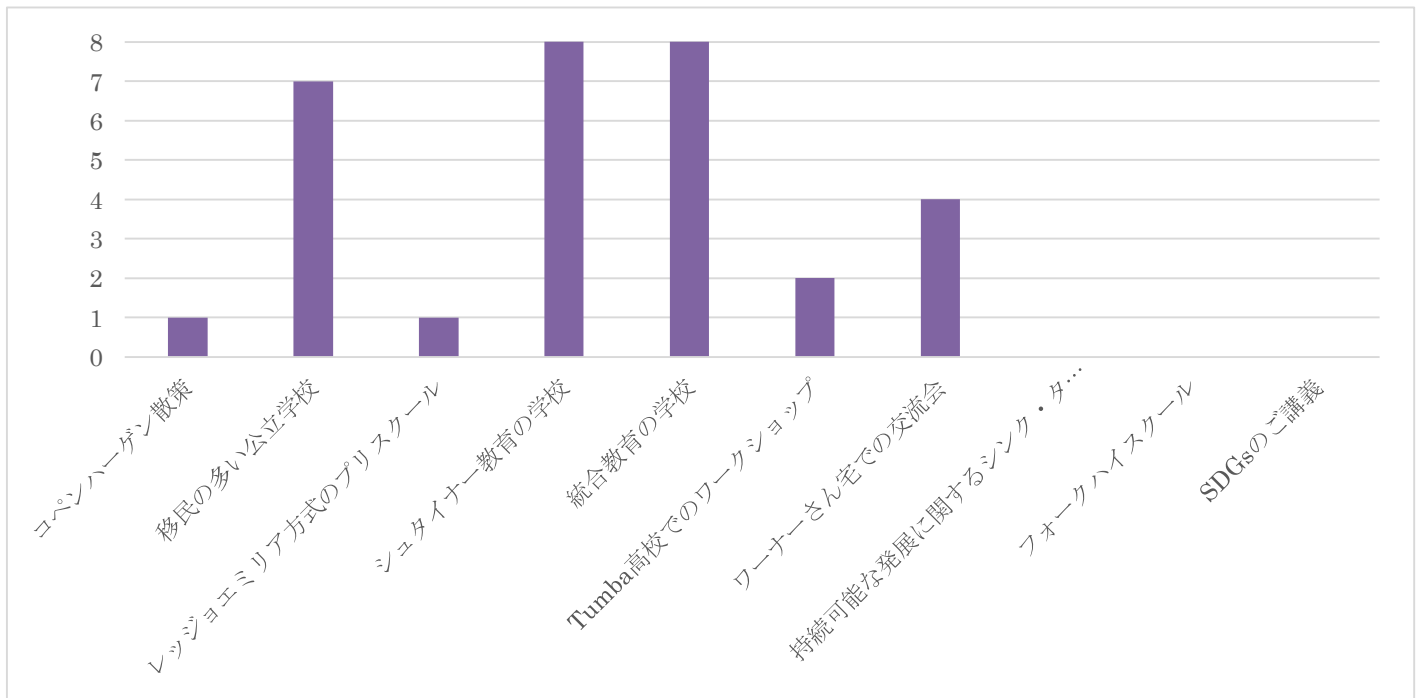
そのストックホルムで今回の訪問時に話題によく上ったのが、地球環境問題に取り組むアクティビスト(活動家)を名乗る16歳のアスペルガーの女子生徒グreta・トゥーンベリさんだった。グretaさんは、15歳だった2018年8-9月に、地球温暖化の危機を訴え、2015年にCOP21で採択された「パリ協定」で定められた二酸化炭素削減の数値目標達成に向けた対策を早急に講じることを政府に要求するために学校を休み、首都ストックホルムの国会議事堂の前で2週間の座り込みをした。その後、金曜日だけ学校に行かずに地球温暖化対策の推進を訴える「気候のための学校ストライキ」を継続している。2019年8月から始まった新学年度は学校からサバティカルをもらって諸外国を訪問し、各地の若者と交流している。グretaさんは自身のツイッター、インスタグラムやフェイスブックを駆使して「政治家は地球の環境を守るための対策を長い間さぼっている」と英語で発言し、COP24やEUの国際会議等で講演も行っている。グretaさんの活動に賛同する青少年は刻一刻と増えいき、欧州から世界に同様の行動が広まっている。「子どもが学校をボイコットすることは認められない」とする国も多いなか、幼い頃から家庭や学校で民主主義の基礎として個人の選択や主張をもつことを重視した教育を行うスウェーデンでは、グretaさんの行動も「ソーシャル・イノベーション」として受け入れ、静かに見守っている。

社会の変革にクリエイティブに取り組む人々を生み出す背景に、スウェーデンでは、就学前教育から学校教育、家庭教育、地域社会のなかの多様な学びの場に至るまで、各人が問題意識を明確にし、創造性を豊かに育む場が多いことがあると思われる。例えば、2015年の欧州難民危機の際、シリア、アフガニスタン、イラクやアフリカの紛争地帯から約16万人の難民が入国したスウェーデンでは、難民・移民の排斥を唱える極右政党が国会で議席を増やすなかで、様々な学びの場で民主主義社会を脅かす差別意識の撤廃に注力がなされている。難民支援のボランティアたちが、社会で孤立しがちな難民が趣味の活動の場を容易にみつけ、友達とつながることができるようなスマートフォンのアプリを開発し、クラウドファンディングにより活動を継続している団体(welcomemovement.se)や、インターネットを通して入国したばかりの難民・移民に仕事を斡旋し、就労のための手続きを請け負う団体(justarrived.se)も次々と立ち上げられた。また、レストラン、カフェやスーパーで毎日廃棄されてきた食品の余り物を、安価で販売するアプリを開発した高校生たちがソーシャル・ビジネスの会社を設立した例もある(karma.life)。ストックホルムではこのような社会的起業家がアイデアを共有しながら社会貢献活動を発展させていく場として、古い建物をリノベートして最先端のIT機器を配備したコワーキング・スペースが新設され、新しいタイプの生涯学習の場としても活用されているのを目にした(Norrskan House, <https://www.norrskanhouse.org>)。

今回の参加学生の関心は、初等中等教育に集中していたため、付録1にも示されているとおり、こうした学校外の学びの場に対する関心が薄かったことは残念だった。自由時間に、スウェーデンの老若男女に愛されている世界初の野外博物館であり、北欧のサステイナブルな自然と社会の格好の学習場所である遊園地「スカンセン」に行った学生は一人もいなかった。今後のスタディー・ツアー事前学習の在り方の見直しにつなげたい課題である。

【付録 1】 北欧研修帰国後アンケート調査結果

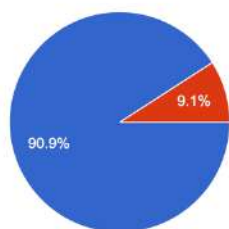
Q1. 最も印象深かったのはどれですか。3つだけ選んでください。



Q2. それぞれ研修先の満足度を教えてください。

移民の多い公立学校（学童）

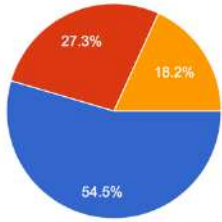
11件の回答



- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



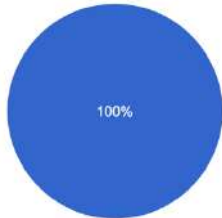
レジオエミリア方式のプリスクール



- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



シュタイナー学校

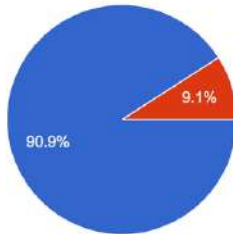


- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



統合教育の学校

11 件の回答

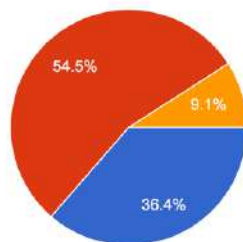


- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



Tumba高校

11 件の回答

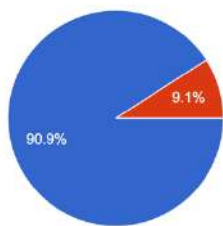


- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



ワーナーさん宅での交流会

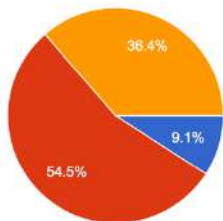
11件の回答



- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



持続可能な発展に関するシンク・タンク

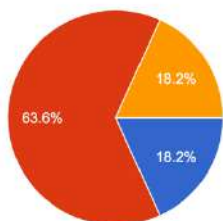


- とても満足
- 満足
| ● どちらとも言えない |
- あまり満足でない
- 満足でない

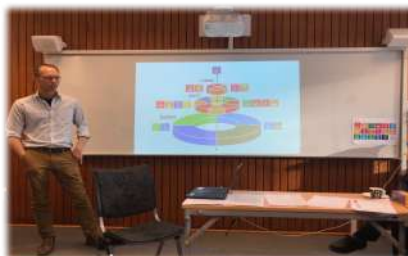


フォークハイスクール

11件の回答



- とても満足
- 満足
- どちらとも言えない
- あまり満足でない
- 満足でない



Q3. 北欧研修で最も印象深かった学校を1つあげ、理由を教えてください。

[統合教育]

統合教育を行う学校の見学です。理由としては、日本では統合教育が徐々に普及している中で、今回見学した学校では統合教育が当たり前というような考え方があり、何らかの障害を持つ子どものことを優先的に考えて、ともに学校内で過ごす環境があることに感銘を受けたからです。

[シュタイナー教育]

製本を通しての学びがなによりも教科間の関連性があり、深い学びだと感じたため。

[移民の多い公立学校]

愛についての授業をみて、子どもの考える愛がそれぞれ違っていて、それぞれに想いがある意見に感動しました。

[シュタイナーの学校]

アートを学ぶ環境という点を見れば、シュタイナー学校は環境がとても充実しており日本との格差が顕著に表れていた。アートを生み出す見地はとても個人的なものでありその人にしか生み出すことができない。つまりこの世に一つしかないものを生み出す力、創造性を育む教育であり、その力はこれからの社会で最も求められるものであると考える。アートを学ぶ環境だけでなく、専門知識を持った教員が多数在籍していることもまた日本との大きな違いだった。

[シュタイナー学校]

木のぬくもりが感じられる暖かな教育環境が整っており、児童1人1人に合った教育をしながら、自立に向けて人を育てている環境に教育とは机だけで学ぶものではないと感じました。

[統合教育]

生徒を全員平等で見る姿勢。手厚い子ども個人への配慮が素晴らしかったから、可能性を感じた。

[移民の多い公立学校]

理由は一人一人の移民のレベルに合わせて教育を行なっているからです。また、学童保育との連携が厚く、子どもたちへの教育の質の向上に向けて熱心に取り組む気持ちが伝わってきました。日本の学童は教育をってしまったてはいけないという法則があるのに対し、スウェーデンは学童で分からなかった授業を復習できる環境が整備されていてとても勉強になりました。

[シュタイナー学校]

シュタイナー学校を文献で読んだときは宗教的な印象を受けたが、実際に足を運んでみると製本など体験を通してその本質を知るという学び方をしており、大変興味深く思った。また、特別なニーズをもった子どもにも配慮しており、どんな子も自分らしく学べる場であると感じた。

[統合教育の学校]

先生方が熱く子どもたちのことをすごく考えているということにすごく感動した。

[統合教育学校]

その理由としては、日本ではインクルーシブ教育といってもまだまだ課題が山積みで、その課題を解決できていない状況で行おうとしているが、ここの学校ではやろうとしていることがとても明確だった。加えて、先生たちの熱意が素晴らしく、健常者ではなく障害のある子達を優先して考え、環境づくりを行なっているところに感動を受けたから。

[シュタイナー教育]

シュタイナー教育に関しては多少の知識があったけれど、自分の中にあるそれらの情報や想像をはるかに上回る教育機関だったので衝撃が強かったから。

・教師と生徒の関係性 大人が働く学校ではなく、子どもが学びに来る学校というのがとても考えさせられた。日本にはないかなと。

・親と子どもへの関わり 食卓の会話をはじめ、親の接し方で子どもの自主性などが育まれる。

・言語 スウェーデン語、英語は話せてあたりま

教育とは何か?教育者はどのようにすべきか?学校とは何かを深く考える研修旅行でした。

スウェーデンでは若者の政治意識が高く、選挙が楽しみであったり、休み時間に生徒同士が政治について語り合ったりする。そうした意識はなぜ生まれるのか?という疑問を持ち北欧研修に参加した。参加してまずわかったことは、学校の意識が高いということである。高校の社会科の授業ではクラスで党に分かれ、それぞれの党について生徒が調べて討論をしたり、政治家が学校に来て生徒の前で議論したりする。また、学校で模擬選挙も行う。そうした学校の取り組みが生徒の政治意識を高くしているのではないかと思う。しかし、学校の取り組みだけが政治参加の意識を高めているのではないとこの研修を通じて考えた。スウェーデンでは小さい頃から民主主義の教育をしていて、レッジョエミリア式の幼稚園では、子どもたちは自分で考え学ぶことができる存在として関わっている。例えば、ご飯は自分で食べる物や量を決めたり、喧嘩をしたときは先生がフォローしながらも子どもたち同士で話し合い、どうしたいかを決めたりする。この幼稚園だけでなく、視察したどの学校でも子どもたちは自分のことは自分で決めることをしている。このような考え方が、自分たちの国のことは自分たちで決めるという意識に繋がり、政治参加に反映されているのではないかと、この研修を通じて考えた。

日本はなぜ教育に当たる資金が少ないのかということと、日本では子どもに対する支援や思いやりが不足していることを改めて考えさせられました。子どもは将来を担う存在であるため、さらに充実した質の高い教育支援をする必要があることをもっと国全体で意識できる世の中になってほしいです。スウェーデンに通う日本人学生に「英語をしっかりと話せない日本は問題だと思う」と言われた際はとても考えさせられました。スウェーデンに来て言語の壁を感じたので、英語の重要さを身に染みて体感しました。まずは先生が英語を話せていないことが問題なので、将来先生になりたいので、もっと英語を勉強しようと思います。

教育だけでなく、全て解決するにはお金が必要であるということ。また、人の中をみて、一人一人の魅力を開花させる教育があるということ。を深く考えました。

日本でスウェーデンのような教育の仕方をするのは正直厳しいのではないかと、ということ。今回学んだことは本当にとってもたくさんあるけれど、日本とスウェーデンの、子どもに対してだったり教育に対してだったりの根本的な考え方が異なりすぎていて、今回の学びをどのようにして日本の教育に生かすことができるのかがわからなくなってしまった。

自分の将来についてどのような人生設計をするか、自分の可能性について考えました。

全体を通して、やはり教育がとても進んでいると感じた。具体的には、カリキュラムに沿った授業というよりは、先生が独自で作上げる授業がされていることであり、日本の教育より先生の質が高いところで求められていると実感することができた。ただ教えれば良い、というのではなく教師自身が一つ一つの問いに対して深く考え、理解していなければ成り立たないと思った。日本も民主主義であるが、民主主義的な考えは正直身についていないと感じ、スウェーデンのように自分の考えを他者に伝えられる力が必要なのではないかと感じた。



幼児期にした経験がその人の人生に大きく関わってくるということを踏まえて、将来は幼児教育に携わろうと思っていたが、歳を重ねても学びをやめない環境、いわば生涯学習環境を整えることも大切だと感じ、どちらか一つではなくどちらも含む環境を整えることはできないか考えている。

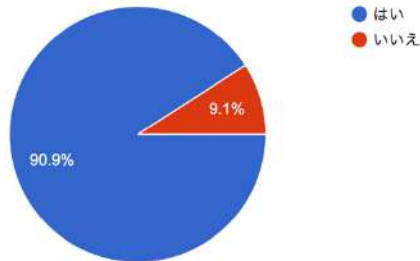
自分の将来について深く考えさせられた。

北欧の教育を何か日本持って帰れるとしたら何があるかということ。



Q5. 北欧研修に参加して自分は変わったと思いますか？

北欧研修に参加して自分は変わったと思いますか？



Q. 「はい」と答えた理由を教えてください

自分のこれまでの過ごし方や、今後について考えるきっかけになったからです。

世界に対する興味関心が高まった。研修前は日本の方しにしか目が向かなかったのだが、研修後は世界に対する関心が高まった。

教育に関する視野、そして、自分の将来の可能性までも広がった

自分の将来について深く考えるようになった。

私はここ最近、就活のことで頭がいっぱいで、スウェーデンでは、大学進学をストレートでする人ばかりではないということを知り、小中高大を卒業して会社に勤めら事だけが人生じゃないのだなと感じたからです。自分の人生について考え直すきっかけになりました。

学童など放課後の教育に対する意識が変わった。将来的に、放課後教育に携わりたいと思っていたが、それは「子どもたちと遊びたい」「面倒みたい」といった浅い気持ちからきたものだった。しかし今回の北欧研修で、学童の学校への関わり方を知り、教育は学校で完結してはいけないという意識が変わった。

Q. 「いいえ」と答えた理由を教えてください

物事を多面的に見るとは、自分の持っている知識以外からも見なければ多面的に見るとは言えないということに気づき、もっと経験や知識が必要だと考えるようになった。

英語を話せるようになりたい、と強く思うようになった。英語は全然好きじゃないので、これは自分の中でなかなか大きな変化。

本物の平等や子供を尊重することというのを見たから。

日本では塾に通うことが普通であり、学校で分からないことは塾で教わるものだと考えていた。しかし、スウェーデンではほとんど塾に通わないことを知り、教育は学校と家庭の中で十分に培うことができるという考えが変わった。なぜ日本では学校教育だけでは足りないとなっているかを考えたときに、知識中心の理解が

研修で様々な知見を得ることができた。しかしそのことで自分が変わったかと言われるとそうではなく、むしろ自分が信じていた信念や理念は間違っていなかったと自信を持つことができ、意思をより強固にできた。自分自身の本質は同じままで、それを取り巻く要素が固められたと感じている。

Q6. 北欧研修に参加し、北欧に対する課題など思ったことを教えてください。

・地域格差が本当に目立つ。電車で長い時間なるほど、豊かではないのか？と何度も考えさせてられた。・私立学校(シュタイナー)では、ほとんどが白人。やはり、移民の子供たちが入るのには壁があるのか？

統合教育などに関しては教師の実力や専門性がより必要とされている感じがして大変そうだった。

たばこのポイ捨てが多いことと、歩きタバコが多い。副流煙が子どもの健康に影響を与えることを理解してほしい。

環境問題や子どもが大切と謳っているわりには路上喫煙やタバコのポイ捨てが目立っていた。

スウェーデン人の人たちは、大人になるとスウェーデンから出ていってしまうということ。少しさみしいことだと感じました。

教師の働き手が少ないということ。少人数なおかつ担任が2人以上の体制であればなおさらだと思った。

移民・難民が多く、子どもたちの母語教育を大切にしている中で、これからの言語を話せる教育者を教育者不足の現状から探したりするのが大変そうだと思います。

校門の外に出たら、子どもに学校は関与しないという姿勢は「個人主義」「自己責任」という点では良いと思ったが、個人的には冷たい印象を受けた。



Q7. 今回の研修を通して思ったことを自由に記してください。

今回デンマークとスウェーデンに行ってみて現地で子育てする人と交流できて本当に貴重な時間でした。今まで漠然と子育てしたいという関心からより具体的にどのような子育てをしたいのか、また子育てする国や環境について考えるようになりました。私たちには選択肢がたくさんあり、これから先どんな将来になるか分からないけれど北欧に行ったことで知らない世界はまだあり、それに可能性もまだまだあるということに気づきました。今回北欧視察に行ったゼミ生や教育学科の人含め、色んな考えを持った生徒と北欧で生きる人達とたくさんの刺激をいただきました。就活をむかえるこの時期に北欧視察に行けたことはかなり人生の財産になった旅でした。

スウェーデンの進んだ教育を見れたこと、また、人生のロールモデルのような大人と接することができてより一層学びを深めていき、人生を考えたいと思えました！

ひとを表すとき、色や人種で区別せずに「目が大きい子」などその人の特徴で判断できるスウェーデンは素敵な国だと思いました。

日本の政府が教育機関に費やす費用の少なさや教育者不足の中でのあまり良くない職場の環境について、北欧と比較することで改めてどうにかならないものかと考えさせられました。

子どもの権利が実際にどれだけ守られているのか、具体的にどのように守られているのか分からなかったが、普段から意見を聞くときも必ず子どもの意見を大切にしていることが分かり、素晴らしいと感じた。それと同時に、家庭教育の役割も非常に大切だと思った。普段の親子の会話で子どもはどう思っているかをしっかりと聞き、大人の押し付けにならないよう教育する必要があるのだと感じたとともに、多くの家庭がそれを実現していることが凄いなと思った。子どもは社会の宝であり、1人の人間であることを日本でも徹底して教育がなされる必要があるのではないかと感じた。

こんなに外国の教育機関を視察できる機会はないかなと思うので本当に貴重な経験になったし、自分の世界を少しだけ広げることができた気がする。教育とはつくづく難しく、面白い分野であるなああと 2173 歳なりに感じた北欧研修だった。澤野先生、加藤先生、いっしょに 9 日間を過ごしたみんなには本当に感謝！ありがとうございました。

北欧研修に参加したことで、日本では感じなかった多くの発見と学びを得ることができました。突然、参加表明をしてしまったのにもかかわらず、受け入れてくださった澤野先生や学生に感謝しています。そして、学校案内をしてくださった校長先生や翻訳をしてくださったエーミルさんなど多くの方の支援によって研修を行うことができました。改めて多くの人々によって今回の研修が行えたことの有り難みを実感しています。この研修で学んだことを忘れずに、日々精進していきたいです。

スウェーデンの先生方は、子どものことを信じて教育されていると強く感じました。やらなければいけないことに追われるのではなく、子ども1人1人と向き合い子どもにあった教育ができていることをはととても素敵なことだと感じました。

教育の面において、日本とスウェーデンはどこがどのように違うのかということが明確に分かりました。日本の教育環境や教育のための制度はスウェーデンに比べ劣っています。しかし、劣っているということは伸びしろがあるもとれるでしょう。自分は日本の教育を変えたいと本気で思います。そのためにどのように動けばいいのか、どのように制度を整えていけばいいのか、もっと勉強して日本の教育を変えていきたいです。

【付録 2】 全日程

Study Tour on 'Nordic Model' of Education and Welfare, Organized by Sawano Lab., Education Department, University of the Sacred Heart, Tokyo, 16th to 24th February, 2019

- 研修の目的：スウェーデンにおける生涯学習システムの現状、インクルーシブな教育と福祉制度、とくに難民や障がいのある人々などに対する特別支援の仕方に学ぶ。

- 参加者： 11 third year B.A. students specializing in education.

YAGURA Mayo, SAITO Riko, SAITO Naho, SATO Kotoka, SHIMAZU Akari, TAKAO Hikaru, MATSUO Tomoko, GORYO Kashiko, TSUJI Kaho, YANAGISAWA Fumi, UEMORI Hana

- 引率教員：

Associate Professor of Children's Welfare, KATO Yoko

Professor of Comparative Education and Lifelong Learning, SAWANO Yukiko

- 全日程

Saturday 16th Feb.

10:00 成田空港第1ターミナル南ウイング4階 Eカウンター集合

12:30 Leave for Copenhagen by SK 984

16:05 Arrive at Copenhagen Airport

ガイド付き貸切バスで Comfort Hotel Vesterbro へ。 ホテル到着後、自由行動

Sunday 17th Feb.

ホテルで各自朝食。10:00 までにチェックアウトし、スーツケースをフロントに預ける。

10:00- Mino Kosmadaki さん（ボランティア・ガイド）と市内観光

15:30 ホテルからガイド付き貸切バスで空港へ

18:10 Leave for Stockholm by SK 410

19:20 Arrive at Stockholm Arlanda

ガイド付き貸切バスで City Apartments Hotel Stockholm (Grevgatan 10) へ。

By 21:00 Check in to the hotel

Monday 18th Feb.

7:40 SQC の Emil Ostberg さんと待ち合わせ

9:00-11:00 Grimstas Skolan, Fritidhus 義務教育学校と学童保育, Kanngjutargränd 12, Vällingby

11:30-12:30 Lunch at Grimstas Skolan

13:00-15:00 Lilla Tensta 就学前学校, Hjulstråket 10-14, Stockholm

16:00 Stockholms Stadsbibliotek (ストックホルム市立図書館), Sveavagen 73, Stockholm
ヨンショーピン大学研究員 Ann-Krisitn Bostrom 先生と面会
17:00 ホテル到着 自由行動

Tuesday 19th Feb.

9:00 Emil さんと待ち合わせ
10:00-12:00 Kristofferskolan (フリースクール、シュタイナー学校、就学前クラスから高校まで),
Marklandsbacken 11, Bromma
12:00-13:00 Lunch at Kristofferskolan
15:00-17:00 Källbirinksskolan (7-9 学年のみの公立学校、障がい児・健常児との統合教育),
Källbrinksvägen 55, Huddinge
18:00 頃 ホテル到着 自由行動

Wednesday 20th Feb.

7:30 ホテル出発 (地下鉄 Östermalmstorg 駅から T-Centralen へ Pendeltag にて Tumba 駅へ
(Södertälje centrum station 行きで8 駅)

Tumba Gymnasium (トゥンバ高校), Utbildningsvägen 2, 147 40 Tumba

8:30-9:40 選択科目日本語 (9 名: 専攻は美術、技術、社会など)
9:50-10:40 専科日本語 (7 名: 人文科日本語コース高校2 年生、うち 5 人が 4 月に日本研修予定)
10:50-11:40 グループに別れて他の授業を見学
学食にてランチ、施設見学

14:10 Tumba 駅発 Stockholm City へ

15:00 徒歩でセルゲル広場、文化会館 (Kulturhuset) へ 子どもの部屋(Barnrumet)見学
自由行動

Thursday 21st Feb.

自由行動

16:50 に地下鉄 Slussen 駅 (Stockholm City Museum 側)に集合

17:00 ワーナー真由美さん宅へ, Peter myndes backe 18、日本人の教育関係者と懇談

Friday 22nd Feb.

Dr. Kennth Abrahamsson (ルリア工科大学准教授)と待ち合わせ

11:00 持続可能な発展に関するシンク・タンク Global Utmaning 訪問, Birger Jarlsgatan 58C
Norsrsken House

労働者学習協会 (ABF) ハウスのカフェにて昼食

13:00 フォークハイスクール Stadsmissionen Folkhogskola 訪問, Sveavagen 41, ABF Huset

17:00 ノーベル博物館, Gamla Stan

Saturday 23rd Feb.

Check out the hotel at 10:45, leave for Arlanda Airport by a chartered bus.

Leave Stockholm Arlanda for Copenhagen by SK1423 at 13:30 and arrive at Copenhagen at 14:40

Leave Copenhagen by SK983 at 15:45

Sunday 24th Feb.

10:40 成田空港着



Written by:

SAWANO Yukiko, KATO Yoko, TAKAO Hikaru, SAITO Naho, SAITO Riko, SATO Kotoka,
SHIMAZU Akari, MATSUO Tomoko, GORYO Kashiko, TSUJI Kaho, UEMORI Hana
YANAGISAWA Fumi, YAGURA Mayo,

発行年月日:2019年11月15日

編集: Mariko Imai & Yukiko Sawano

表紙デザイン: 高尾ひかる

発行: 聖心女子大学現代教養学部教育学科

